魔法なんかにゃ、負けねーぜ！！～これが俺の百鬼夜行～

黒黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法なんかにゃ、負けねーぜ！！～これが俺の百鬼夜行～

【Ｎコード】
Ｎ５７７１Ｏ

【作者名】
黒黒

【あらすじ】
ある日、神にもわからない理由で死んだ・・・
理不尽な運命により転生させられる主人公。
神の情けなさに失望しつつ精一杯の嫌がらせ（原作ブレイク）をする事を決意する。
妖怪と対話する能力を身につけ、いざ行かん百鬼夜行探しのたびへ！！

プロローグ（前書き）

原作ブレイクを目的とした主人公が暴れまくるお話です。
苦手な方はお戻りください
こらからよろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

・・・ここは何処だろう？
見渡す限り野原
しかし普通の野原じゃない白黒だ

「ふぉふぉふぉふぉふぉ、驚いておるのう」

声がした方を向くと、そこには立派なひげを蓄えた爺さんが居た

「何もんだ？」
「うむ、神じゃ」

・・・なんだ、ただの痴呆が進んだもうろく爺か

「む、なんと無礼な事を言う小僧じゃ！！」

心を読まれた、もうろく爺改めサイキック爺の間違えだった

「って、なんで俺の考えてる事がわかった！！！」

「神じゃからのう、何故と言われても困るのじゃが？」
何なんだこいつ、どうしよう凄いんだかアホなんだかの判断がつかねえ

「ああ、そういえばのう、お主死んだから」

は？今こいつ何つった？死んだ？誰が？俺が？ははは、そんな馬鹿な！！
「ふざけんじゃねえぞ！！言って良い冗談と悪い冗談があるんだよ！！！！！」

「うむ、わしも想定外でな
お主の死んだ原因が全くわからぬのじゃよ。
じゃから詫びと言う事でお主に第二の生を与えようと言う結論になった」
何言ってやがるこいつ、ふざけんじゃねえ

「殺してやろうか？そもそもだ、あんたが神だとしようぜ？
で？俺が死んだ理由が、わからないだと！？何だよそりゃあ！！！！！」

「じゃから侘びじゃよ。いくら神と言えど同じ世界に全く同じ人間を出現させる事はできん」

「本格的に殺してぇ」

「まあ、焦るでない。そうじゃ！
少し危険な所なのでの、それにあたってお主の願い五つ叶えてやろう」
手のひらを突き出してくる。何、折って良いの？
そう思った瞬間、神（自称）手を引っ込めた
「・・・俺はまだお前の事を神と認めたわけじゃねえんだぞ？」

「ちなみに転生する、世界は【ネギま】じゃ」

「魔法が在る世界、か？本当に出来るんだったら、そうだな
俺に【ぬらりひょんの孫】の主人公、『奴良　リクオ』みたいにぬらりひょんに変化できるようにしろ」

「ふむ、一つ目じゃ。あとは？」

「【ぬらりひょんの孫】でリクオが使ってた技を使えるようにしろ、あと自分で技を開発できるように。
【刀語】の『鑢　七実』の見稽古、あと妖怪と会話できる能力
これで五個だな」

「ふむ、最初の四つは解らんでもないが
なぜ妖怪との会話を試みる？」

「もしもその世界に行けるんだったら、仲間増やしてお前の世界に迷惑かけて仕返ししてやる」

「なんともひねくれておるな、まあ良い行って来い。貴様の人生だ！」

「あ！なんかかっこよく締めようとしやがって！！
ゆるさねえぞ！おい」

「ふぉふぉふぉ、次会うときはお主がまた死んだらじゃ。せいぜい長生きしろ」

「くそがあああああ！！！！」

「ふう、行ったか。さて、奴が死んだ原因調べなくちゃな残業じゃなこれ」

プロローグ（後書き）

駄文です。文才が欲しいです。
変なところとかあったら言ってください

1話「転生！！そして、祝・百鬼の一人目

知らない天井・・・・じゃない！！
外じゃねえか！！！さむっ！

～あーあー、聴こえるかの？～

「この声は、忌まわしき魔王サタン！！」

～ちがうわ！！っとと、そう言えばのう。お主が死んだ理由が掴めた。～

「何で俺は死んだ！！」

～いや～、わしの部下の天使に地獄からのスパイが入り込んでての、わしを神の職から降ろそうとしておったのじゃ～

なんとも陽気な声で言ってくる爺

「で、ここは何処なんだ？」

～え～、そこは京都じゃな、良かったではないか。お主の目的の妖怪が出るかも知れんぞ？～

京都か・・・、関西呪術協会が在るとこだよな？

～一応動作確認と言う事で変化してみよ。ほれ鏡～

「変化？」

どうすりゃできんだ？

～ギュー、としてポンッじゃ！～

「何じゃそりゃ！？」

～いいからやってみ！～

うーん、ギュー、としてポンッ

あ、すげっ、出来ちゃったよ

外見は、髪黒いな。そういや【鯉伴】もこんな感じだったな

・・・つーか殆ど【鯉伴】のまんまじゃねえか？チビ鯉伴だな！たぶん5歳くらいか？

それにいつの間に服着てんだ？・・・着流しって言う奴かな？あと、羽織・・・『畏』印の

あ、目の色が違うな、紅い。

変化解除っと

「・・・誰これ？何？え、俺っスカ？」

鏡に映る銀髪ポニーテイルの子供が居た。

【鯉伴】が後ろに伸びてる髪切って染めてたらこんな感じだろーなー。チビだけど

～まあ、良いわい。変化できるのだったら。それと、近くに箱が置いてあるじゃろう。その中に詫びの品が入っている。開けてみい～

「これか？こ、これは、【祢々切丸】！それに、あんた、これって、嫌、好きだよ？好きだけどさあ。」

～祢々切丸は元々のオプションじゃ、もう一本は、解ってるみたいじゃな？うむ、【薄刀・針】じゃ。何じゃ？要らんのか？～

「使わせていただきます！！」

～ちなみに折れても妖力を込めれば直るからの。後二つ在るじゃろう？～

俺は箱をあさってみた

「・・・なんだ、この和風な家が入ってるボトルは」

～お主が、妖怪を仲間にすると言っておったからな。その中に仲間の妖怪を入れられる、エヴァンジェリンの別荘のような感じのものだ。別に時間の変動は無いがの、その代わりお主に転移の能力を憑けた。それが在れば自分から５０ｋｍの範囲内か、そのボトルの中に入るのであれば何処でも移動可能じゃ。時間制御は付けたければ自分で付けろ～

「ちっ！ケチンボ爺め」

～・・・はあ、あともう一つは笛じゃ。～

黒い横笛が出てきた。

「俺のじゃん！」

そう、家の地域では祭りが盛んだから良く吹かされていたのだ。

～わしが神通力で強化しておいた。お前が吹けば知能が無く、暴れるだけの妖怪に知能を与え、対話出来るようになるじゃろう。あとな、名前じゃ。

お主名前どうするんじゃ？～

「あ、それは、どうしよう」

苗字は奴良で良いかな？これから作るの言わば【新生・奴良組】だし・・・

名前・・・、薄刀持ってるから白兵？

奴良　白兵・・・もうこれでいいか。メンドクサイ！

「と言う訳で、奴良　白兵で！」

～どう言う訳じゃ、ったく。あ、今、情報改竄が終わった。これで働いたりも出来るじゃろう。ではな達者で暮らせよ～

「くそ爺もな」

そう言うと気配が完全に消えた・・・

「よし、そろそろ行くか！」

がさがさっ！

「むっ！？」

「キュ～ン」

白いワンコが出てきた。怪我してる、ワンコは好きだから助けよう！
折角家もあることだし。

「よ～しよし、怖くないぞ～」

そういって俺はワンコと別荘の中に入った。

「おお！広い！？あ、治療用具もあるな。魚とかも住んでるっぽいし、この中で生活できんじゃん！あ、まず治療治療」

このとき俺は知る由も無かった。このただのワンコだと思っていたのが、実は神変を宿した高位の大神と呼ばれる存在で、百鬼の記念すべき第一号と言う事を・・・

1話「転生！！そして、祝・百鬼の一人目（後書き）

うう、文才が、欲しい。
と言う訳で自己満足な小説ですね・・・
次は一応木ノ香と刹那に会わせて置こうと思います。
では、また次回

2話「白い翼の少女とトンカチツッコミ少女」＋作者のお願い（前書き）

作者のお願い
これからの話のなかで百鬼夜行を作って行こうと思うのですが、なにぶん妖怪などに疎いもので。
そこで、これを呼んでいただいている方々にオリジナルの妖怪、有名な妖怪などの事を教えていただきたいのです。
もし教えていただけるのであれば、妖怪の名前・特徴などを教えて欲しいです。
オリジナルの方は名前や技なんかもよろしければ教えてください。

2話「白い翼の少女とトンカチツッコミ少女」＋作者のお願い

ｓｉｄｅ詠春

ある用事で外に出ていた私は、森の中で強大な妖力を感じた。
すぐに夕凪を持ち駆けつけてみると一つのボトルが在った。
たしか空間魔法の一種だ、物によっては時間さえも操る事が出来てしまう代物だ。

「何故こんな物がこんな森に？」

この時点で私は間違えたのかもしれない。
まあ、色々と・・・・はあ

私は不用意に近づいてしまい、気付けば家のような和風な景色が広がっている。
しかし、色々とおかしい。あちらに桜があると思えば、あっちの山に紅葉した紅葉、向こうは雪が積もっている。ヒマワリなんかも咲いている。

「・・・何なんだ、ここは」

「誰だ？」

私は忘れていた。自分がここに何しに来たのかを。此方を圧迫するような力の波動！
とっさに声がした方を向き戦闘体勢に入る。正直さっき放たれた敵意だけで心臓に悪い、汗が一気に吹き出てきた。
・・・しかし、そこには誰も居ない。

「・・・気のせいだったか？」

「そんな訳無いだろう？」

ザッザッザッ

確かに要る、だが見えない。

何なんだ？妖術か！？

・・・どうやら、格が違う相手のようだ。

何となくだが解る。

勝てない

ただ、それだけ、しかし、これでも大戦を潜り抜けてきた勘という物がある。

相手が自分に殺意を抱かないうちに降参しよう。

そう思い刀を自分の足元に置き両手を挙げ言った。

「降参だ。私じゃ君には勝てない」

ｓｉｄｅ白兵

「降参だ。私じゃ君には勝てない」

そう言って降参の意を示しているのは近衛　詠春、原作キャラだ。

行き成りか・・・

と言うか、何でこうなった

数分前・・・
「よし治療おわり、痛くないか？」
「わんっ！！」
「そうか、お前名前は？」
「わんわんっ！！」
「ははははは、うんうん、そうかそうか！！」
どーしよう、意思の疎通が出来ない（汗
そう言えば神に貰った笛、これって妖怪以外にも効くかな？
と、言う訳で試しに吹いてみた。
「・・・いい曲ですね～」
「だろ？これ俺意外と気に入って・・・、あれ？今喋った？」
「はい、何か曲を聴いていたら頭がだんだん冴えて来て喋れるようになりました！！それでは改めて、ありがとうございます。僕は大神の「千」と言います。」
「・・・大神、って！神様か！？」
「どちらかと言えば妖怪ですね」

「妖怪、妖怪、ね・・・あ、俺は奴良　白兵だ。」

何かを企んでる顔で笑っている・・・

「それでですね、恩返しをしたいんです。」

「フフフ、恩返し・・・これはちょうど良い。」

「どうしたんですか？」

そう聞かれると、俺は変化した。

「な！？ぬ、ぬらりひょん様でしたか！！！」

こっちの世界でもやっぱ有名なんだな、さすが総大将

「俺はこれから妖怪を募って百鬼夜行を作る。そこでだ、お前が恩返ししたいのだったら俺の背中に付いて来い！もし来るんだったら、記念すべき一人目の百鬼だ！！！
どうだ？来るか」

「・・・・行きます！この千付いていかせて頂きます！！」

うわ～、何かすげ～きらきらした目で見てるよ。
そんなに効き目あったか？この台詞。

「そうと決まれば来い、杯をかわすぞ！！」

「はい！」

そう言って適当に台所にあった酒を注ぎ千にも飲ませた。

「あと、羽織か。犬用の羽織あるのかな？」

ここで新たに解った事、ここでは望む物は大方手に入るらしい。

「わ～、凄いですね！！」

「これでお前も奴良組だ。俺のことは何とでも呼んでいいぞ？」

「はい、がんばります！っつ！？白兵様！！侵入者が！！」

「何ィ！？よし、畏の実験してみるか」

回想終了♪

「と言う訳で、貴様は誰だ？」

「近衛　詠春、と言う」

まっ、知ってるけどね？

「何故こんな所に居る」

そう聞くと詠春は説明し始めた。

森で感じた妖力、関西呪術教会として放っておけなかった事

「ふむ、たしかにあんな所に置いておいた俺にも非はあるか。」

「白兵様？どうするんですか？これから」

「う～ん、そうだ。おい、詠春とか言ったな？俺を少しの間その関西呪術教会に置いてくれないか？」

「な！？いわば敵の本拠地だぞ？良いのか！？」

「お前だって俺を観察しておきたいんだろ？妖怪の総大将ぬらりひょんを」

百面相している。ははは、面白っ！

ｓｉｄｅ詠春

「う～ん、そうだ。おい、詠春とか言ったな？俺を少しの間その関西呪術教会に置いてくれないか？」

驚いた、確かに観察下に起きたいところだ。ぬらりひょんといえば妖怪の総大将。

姿が幼いとはいえ、危ない事をしないか見ておきたい。だが、

「何が目的なんだい？」

「そこに行けば、妖怪の情報がたくさん着そうだからな。奴良組が手っ取り早く集まりそうだ。

情報を俺に優先的にくれるんだったら、それなりの恩返しはするぜ？」

「・・・」

悩んでいるうちに思い出すのは半妖の少女、あの子にこの子を会わせれば、あの子なりの答えを導き出せるかも知れない・・・
自分の娘とよく遊んでくれている子の心の傷を和らげるために、もしかしたら何かしてくれるかも知れない・・・・
だから私は、こう答えよう

「いいでしょう。」

ｓｉｄｅ奴良
そう言う訳で詠春の家に付いた。（もちろん変化は解いてある）
・・・でかい、下手すると俺の別荘の５倍位あるかもしれない
呆然としていると、詠春が進んでいくので付いていく

「木ノ香、刹那君、入りますよ？」

［ええよー、お父様～］　［はい］

その部屋には白い翼の少女とトンカチツッコミ少女が居た。

2話「白い翼の少女とトンカチツッコミ少女」＋作者のお願い（後書き）

文才がないｏｒｚ
いろいろと解りにくいと思います。すいません！
気が向いたら子の小説読んでやってください。

3話「問題・百鬼夜行は今何人？」（前書き）

題名に意味はありません。
でも、気が向いたら数えて見てください。

3話「問題・百鬼夜行は今何人？」

ｓｉｄｅ白兵

俺がここに来てから半年ほど経った。

え？行き成り跳んだ？前の話の後どうなったか？半年何してたか？

え～と、説明めんどくせ～な。

「白兵様！こんな所で何してるんですか！？早く来てください、兄貴とシュウさんが暴れて止められるの白兵様だけなんですよ！と言うか木乃香様と雪と瑠璃が詠春殿にイタズラしてるんですど！？」

今俺の前に居るのは白髪の子供、千だ。別荘で【誰でも人型変化薬】作ってみたら意外と出来た。

戦闘力は落ちない優れもの。なんとお値段・・・いや、なんでもないです。

ツーかこいつ見れば見るほど美形だな、実際、この屋敷のお手伝いさんのお姉さん達がたまに危ない目で見ている。

「ていうかまたか、あいつらは何で喧嘩が好きかねえ。ハア、行くぞ、千」

「はい！」

あ～、で？何だっけか？

ああ、半年の間に何があったか？

解ったよ。はい、回想ど～ぞ

回想
「木乃香、刹那君、入りますよ？」
［ええよ～、お父様～］　［はい］
白い翼の少女とトンカチツッコミ少女がいた。
俺のこの体の年齢と同じくらいだな
「お父様おかえり～。」
「お帰りなさいませ、長」
「はは、ただいま。それと刹那君？そんなに硬くならなくても良いよ？」
「なあなあ、お父様この子は？」
「ああ、この子はこれからしばらくここに居ることになった・・・
「奴良　白兵だ。」だそうです。
二人とも仲良くしてあげてください。」
「な～な～、お友達になってくれるん？」
「こ、このちゃん」
木乃香がこっちに近づいてきて目をきらきらさせている。刹那の方は少し警戒してるっぽい？
「ああ、いいぜ、よろしくな？」

「よろしゅーなー、ウチは木乃香ゆうんよ～」

「え、えと、桜咲　刹那です。」

「わんっ！！」

「わんちゃんや～」

「ああ、そいつは千。仲良くしてやってくれ」

まあ、こんな感じでこの二人との邂逅は済んだ。
で、この半年の主だった事件は、え～と
木乃香に裏の存在がばれた。つ～か、ばらした、確信犯です。
そしてなし崩してきに木乃香が組み入り（仮）
あ、すいません！石投げないで、人間じゃね～かなんて言わないで、
一応仮だし、誰でもあんな風に
「入れてくれへんの？」って涙目で上目遣いされたら落ちるっつ～
の！！！
何か今は回復の術とか覚えているらしい。うん、きっと役に立って
くれるさ。
ちなみに木乃香も羽織を着ている。

刹那は、うん、これは説明するより見たほうが早い

木乃香や刹那と打ち解けてきた次期、俺が散歩していると刹那が虐
められてた。
まあもちろん追っ払った。奴良家一子相伝フライング妖怪ヤクザキ
ックで

それでないてた刹那に虐められていた理由を聞いた。
ま、知ってるんだけど。
すると刹那は悲しそうな顔をしながら言って来た。
多分、嫌われるとでも思ったんだろう。

「う、うちが、化け物やから。ヒッグ、グス、みんなに嫌われてこんなんに生まれてきとお無かった」

「・・・そこまで言われると傷つくな。」

そう言うと刹那が不思議そうに首を傾げてきた。
名にこの生き物かわいっ！！！持って帰りてぇ！！！！

「なんで白くんが傷つくん？」

「は～い、俺の秘密その？『実話俺は人間じゃない！！』」

「？」

首をかしげている。これが、萌えか・・・同じクラスにいたオタクの奴馬鹿にしてすまんかった。
俺は今萌え死にそうだ！衛生兵、衛生へ～い！！
と、言う訳で変化

「・・・・？」

ありゃ、視ただけじゃ解んなかったか？

「俺はぬらりひょんだ。俺がこんなに堂々と生きてんだ。お前も堂々としてればいいんだよ！」

「・・・／／／」

ん？どうしたんだろ、顔が赤いぞ？

・・・ん？よくよく考えると刹那は半妖・・・ニヤリ

「刹那、俺はな。仲間集めて百鬼夜行作ろーとおもってんだ。お前も仲間に入りたかったら、俺について来い！」

「は、はい／／／／／」

と言う訳で刹那も組み入り（仮）。

あ～、あと千が言っていた２人は。

「貴様！俺を犬扱いとはいい度胸だな！！ああ！？」

「お前なんか犬で十分だろう！！」

「んだと！？」「やるのか！？」　バキッ、ゴキャッ！！

甚平の上に羽織を着た銀髪銀眼の男が、身長２８０ｃｍ位有るんじゃないかと言う、赤髪の大男と殴り合っている。こいつも羽織を着ている。

「やめろ、斬牙！朱剛！」

斬狼という妖怪の斬牙、こいつは一応上位の妖怪で、狼犬系の妖怪

を取り仕切ってもらっている
「斬狼組」の長だ。
義理堅くいい奴で、千とかの狼犬系の妖怪からの信頼が厚く他にいる妖怪たちにも一目置かれている。
こいつが来てから狼犬系の奴らが増えた。いまんとこ２０人くらいだ。千とかは兄貴って呼んでいる。

朱剛は、酒天童子と言う妖怪で、今は【誰でも人型変化薬】を飲んでいる。
変化していない時は肌が赤く背も６ｍを超し、角が生えてくる。伝承みたいに赤子の顔はしていない。
もう何か、鬼！って感じの奴だ。
こいつもいい奴で、鬼系の妖怪をまとめている「酒天組」の長をしている。
たまに一緒に酒を飲んだりしている。

そう言えば組って言ってるけれど別に原作のように日本に散らばっている訳じゃない。
別荘を拡張して、大きい建物を何個か建てているだけだ。
組の妖怪たちは別に人間を毛嫌いしている奴らは居なく、むしろ優しくしてくれる木乃香や刹那を好いて自主的にさらわれないよう警備している。
そう言えば詠春と仲が良いのもこいつ等だ。

「おう！聞けよ、白兵。こいつが俺の事を犬扱いしてきやがるんだぞ！？」

「どっからどう見ても犬だろうが！」

「ああ！？やんのか！！」

「やってやろうじゃねえか！！！」

バキイッ！！！

「うるせえ！だまれや！！つ～かお前らわなあ、仲いいときと悪いときのギャップが激しすぎんだよ！
昨日は詠春とかと仲良く飲んでたじゃねえか！ていうかお前ら周りを見ろ、ボロボロじゃねえか！
せめて別荘の中でやれや！！！」

「「むう」」

「ちゃんと片付けておけよ？」

「「解った・・・」」

じゃあこいつらとの邂逅を話そうか。

ｓｉｄｅ白兵

「白兵君」

「なんだ？詠春」

俺が別荘の中で休んでいると詠春が来た。

「妖怪の情報、君に優先して回す約束だろう？」

「おお、どんな奴だ！？」

「斬狼と言う妖怪で、爪は鋼鉄の鎧を斬り裂き、その牙はダイアモンドすら噛み砕く程の力を誇ると言う強力な妖怪だ。」

「ふ～む、よし。手は出すなよ？咏春。そいつは俺が貰う！」

「・・・好きにしてくれ」

その返事を聞くと俺は跳ね起き祢々切丸を持ち現場に向かった。

ｓｉｄｅ斬狼

今俺の目の前に変なやつが居る。

「お前が斬狼だよな？俺はぬらりひょんの奴良　白兵だ。俺は今仲間を募って百鬼夜行を作っている。どうだ？お前も一緒に来ないか？」

「俺に仕えろと言うのか？」

「ああ、そうだ。俺のほうが強いからな」

ふん、面白い奴じゃねえか。

「お前のその大口、嘘か真か。試させてもらうぞ！！

畏の発動『獣牙装甲』！！」

「俺の杯に波紋はたたねえ、いくら触ろうとしても水面に映る月の如く」

「喋ってる暇なんてあるのかよお！！！牙狼拳！」

はいった！！

「鏡に写る花の如く、その攻撃は虚空を切る。『鏡花水月』」

確かに当たった。しかし手ごたえが無い・・・っ！？幻覚か！

そう気が付いた瞬間横から斬撃が迫ってきた。

俺は体をひねりその斬撃に対して攻撃を行った。

「牙狼斬！！！」

ギャインッ！

「っつ！？お前やっぱり強いな。仲間になれよ。」

・・・こんな状況でも仲間になれよ、か？

「ふふふ、はははははっ、面白い！気に入った！！良いだろう、この身お前に預けてやろう！！」

「おお！マジでか！？やったぜえ」

ふふふ、これからは退屈しないで済みそうだ。

斬牙はこんな感じで仲間になった。

と言う訳で次は朱剛

ｓｉｄｅ白兵
また咏春から情報を貰った。
するとそこにはめちゃくちゃでかいやつが居た。

「お前が酒天童子か？」

「なんだ、チビ助。」

「俺はぬらりひょんの奴良　白兵だ！！俺は今百鬼夜行を募っている！！お前も一緒に来ないか！？」

そして俺はこういった。

「うまい酒も用意してやるぞ？」

「乗った！！」

お酒が好きなんだよな？お前は
こんな感じで酒天童子はそれで良いのか？と言うほど簡単に仲間になった。

そして・・・

「雪、瑠璃、それと木乃香。駄目だろうが」

雪女の雪そして座敷わらしの瑠璃こいつらは木乃香、刹那と仲が良い。
どちらも優しい子で外見もそう木乃香たちと変わらない女の子だ。
この二人は夜散歩していたところに居たので仲間に入ってもらった。

「木乃香もう駄目だぞ、こんなイタズラ。」

少し凍っている詠春が木乃香に言い聞かせている。

「そうだ、まったく。イタズラするときはもっとスケールをデカク！！俺も呼んでやれっていつも言っているだろ！？」

「「「は～い」」」

「は～いじゃない、と言うか白兵君。君もあおってどうする。」

「いや～、つい」

「ついじゃないでしょう！！」

「やべっ！逃げるぞ！！刹那っ！！来てくれ」

そう言うが早いか俺は両脇に雪と瑠璃を抱えて空を歩く

木乃香も刹那に抱っこされて跳んでくる。

まあこんな毎日を過ごしているわけだ。

おっと、詠春が来た！

3話「問題・百鬼夜行は今何人？」（後書き）

めちゃくちゃです。
木乃香が魔法を知り、刹那が羽の事について前向きになり、百鬼もそれなりに集まってきました。
斬狼のアイディアをくださった美仁さんありがとうございます。
他の方もオリジナルの妖怪や知っている妖怪などの事をぜひ教えてください！！
では、また次回。

4話「妖界！？」（前書き）

今回はぬら孫の方の原作から妖怪を結構とって来たいと思います。

4話「妖界！？」

ｓｉｄｅ白兵
今日は俺の最近の出来事を話そう。
まああれだ、有りがちな日常編って奴だ。
では、始まり始まり！

「なあ、雪」

「なに、長？」

「あのさ、うまいよ。うまいけどさ、何で、凍らしちゃうかな？」

そう、雪の料理はうまい、うまいのだが凍っている。あの、なにか？リクオが弁当貰ってた時も凍ってたから雪女には食べ物を凍らせる習性でもあんのか？
そう思い聞いてみると

「えっと、熱いと融けちゃうから・・・」

え、なに、雪女って融けるの？
何かやってみたい気もするが、そんな事で大切な家族が居なくなるのは忍びないので辞めとく。

「おい、白兵。」

「あ？どうした、斬牙」

「俺のとってあった饅頭が無くなっているんだが？」

「・・・真・明鏡止水！！」

「ぬあ！？どこ行きやがった。くっそ、牙狼斬・円！！」

そう叫ぶと斬狼はくるくると回りだして所かまわず斬撃を・・・って、うお！？あぶねえ！！

「「白く～ん！！」」

「木乃香、刹那、今はくんな！！」

「そこかぁ！！牙狼拳！！！」

「く、確かここら辺に、あった！！明鏡止水・桜！！！」

「あちっ！室内でそれは無いだろ！」

「お前こそ所かまわず斬りやがって！！」

「喰らえ！！牙狼拳・双葉！！！」

斬牙が両拳を畏を纏わせ本気で突き出してきた。

「何の！奴良家一子相伝フライング妖怪ヤクザキック！！！」

ガシャコ～ン！！

「二人ともいい加減にしなさい！！我が身にまといし眷族氷結せよ

客人を冷たくもてなせ　闇に白く輝け　凍てつく風に畏れおののけ・・・」

「げっ、雪それは待て！！」

「もう一回明鏡止水・桜で、あ～！器が壊れてるっ！？」

「呪いの吹雪・風声鶴麗！！！」

カチ～ン！！

「・・・これ二人とも大丈夫なん？」

「このちゃん、火使える人呼んでこよ！！」

「ここに炙ちゃんおるで？炙ちゃん狐火や！」

「きゅ～！」

ぼっ！！

「「あっち～～～～！！！」」

「ありがとうな？炙ちゃん」

「きゅう！」

木乃香が抱っこしているちっこい狐、九尾だ。名前は炙。

何故か知らんが狐火が使える。・・・精度はごらんの通りまだまだだが。

こいつは木乃香たちが遊びに行っている途中で見つけ遊んでいたら懐かれたらしい。
たぶん木乃香の使い魔に成るだろう。

「で、どうしたんだ？二人とも」

「あっ！あんな～皆でお花見いかへんか～？ってお父様が言ってたから」

「白君たちも行かんかと思って・・・」

「おお、花見か。もうそんな季節か。」

「でもここら辺に組の奴ら全員行ける所なんてあんのか？」

「お父様が少し行ったところにあるお山のてっぺんにあるゆうてたよ？」

「ふむ、ハイキングか。面白そうだな。よし、行くか！弁当はどうする？」

そう話していると詠春が歩いてきた。
と言うか最近何の前触れも無く来るな、一応妖怪の総本山を目指して頑張っている所だよ？

「ウチの者に任せたいところなのですが。なにぶん今日は都合が悪いらしく。」

「ふ～ん、じゃあ雪、小豆と瑠璃呼んで弁当作ってくれ。」

あ、小豆ってのは小豆洗い。何か凄い美少女です。
１００人が１００人振り向きます。

「とても私たちだけじゃ出来ませんよ？」

「う～ん」

悩んでいるとちょうど牛鬼たち一行が通りかかった。
そう言えば原作キャラたちがそのまま居たのには焦った。
もしかしてモノホンの奴良家があってつぶされんじゃないかと思った。

「あ、牛鬼。ウチの組で料理できる奴しらねえ？」

「いえ・・・牛頭丸、馬頭丸、お前達は出来るか？」

「いいえ、出来ません。」

「あ、毛倡妓は～？」

「今日は首無しつれてどっかいった」

「・・・駄目だな、思いつかん。
あ、そう言えばカラス天狗は何処だ？あいつだったら何か知っているかもしれん」

そう思い出したように呟くと、牛鬼が首を横に振っている。

「長、あいつは息子達と旅行中です。」

「・・・千は？」

「あいつにも休暇を出しているでしょう？」

「黒に青は？」

「あいつらは外の世界にバイトに行っております。」

「河童」

「あいつはＣＤを買うとか行ってどこかへ行きました。」

あれ？なんか想像以上に使える奴が居なくないか？

「氷麗は？あいつ料理できたよな？」

今頃だ、本当に今頃だ！！

一番最初の方にも思い浮かべてたじゃん。

「いや、あの」

何故か牛鬼が微妙な顔をしている。

「何か有ったのか？」

「いや、その何かを起したのが貴方なんですが・・・」

「そうやえ～、氷麗ちゃん。昨日の事すっごくおこっとたえ？」

・・・あ、やべ！

そういや昨日落とし穴庭に仕掛けて真っ先に落ちたの氷麗だったっけ？

「う～む、あ！」

「何か思いついたのか？白兵」

「リョウタ猫達の化け猫組は？」

「「「「「あ、忘れてた」」」」」

つ～訳でリョウタ猫たちに頼んで弁当用意してもらった訳です。
まあ、全員来る訳じゃなかったからそこまで時間はかからなかった。

ここで説明しなくちゃ成らない事が有る。
少しずつ少しずつ別荘の範囲を広げていったら、もうホントものスッゴイ広さになった。
しかも前に探索していたら海みたいにでかい湖があって魚が居た。

いや、魚だけだったら対して驚かない、一番初めの時も居た。つ～か今では鹿とか猪まで居る。
そう驚くべき事はなんと、魚たちが妖力に当てられたのか何なのか知らんが突然変異していた。
ちょっと前に詠春、朱剛、斬牙、青田坊、黒田坊、首無し、牛鬼、千、カラス天狗、その他もろもろで釣りに行った。
首無しの独壇場でした・・・あいつに糸を持たしたら駄目だ。
それでまあ調理してもらったんだが、これがなんとめちゃくちゃうまかった！！
今度から捜索隊組んで定期的に探索しようと思う。
美味いもんが有るかも知れないからな？

そう言えば、この別荘が一つの世界みたいに成って来ている。妖界だな！！つ～かタイトルそのままかよ！！
さっき言った、リョウタ猫たち化け猫組は、この本邸から少し離れた所で商店街みたいな物をひらいている。妖怪横丁だな！！
それこそ原作の妖怪しか入れない町みたいにあのにぎやかな雰囲気がある所になった。

最近は俺が開発した【誰でも人型変化薬】で外の世界で働いている奴が出てきた。青や黒もそうだ。
その金でこの別荘の中でサイクルがうまれている。
まあ、別荘内で食えそうな物探して持ち込んでも料理してくれるが。
大多数が金で買っている。
化け猫組が野菜や家畜なんかを飼って、それを調理する。金を払う。
それを元手に化け猫組が表の世界で必要な物を買って、という風にだ。
よく考えてみるとこれは凄い事だ。一つの世界が確立されてしまっているのは。
さすが神印の別荘だ、何かまだまだ広げられそうだと言う所が恐ろしい。
まあ何だかんだいって楽しくって良いんだけどな？
木乃香や刹那もたまに遊びに言ってお小遣いで射的とかヨーヨー釣りとかやっているみたいだし。

・・・木乃香たちより射的が下手なのは内緒だ！

え？百鬼夜行作った意味は？だって？良いんだよ。たまに度が過ぎない程度の悪戯はやっている。
まあ、怪我しないようにであって手加減はしていないがな！！
悪戯には全身全霊を尽くして相手をはめる！！！これがウチのモッ

トー！！

あとはたまに戦ったりもします。
もう殆ど京都は俺たちの縄張りなので、度が過ぎている奴等は叩き潰します。
関西呪術教会からの依頼と言う事で、色んな奴等と戦ったりしますが、この妖界（もうこれで通す！）
の生き物が強いせいか組全体の戦闘力がヤバイので、大抵の敵は俺達主力メンバーが出なくても片付く。
それこそ、戦闘系ではなかった筈の化け猫組でさえそこらに居る奴等には勝てるほどだ。

・・・俺がチートじゃなくてこの組がチートな気がしてきたのは俺だけじゃないはずだ。
はっきり言って赤き翼が来て敵対しても無事では帰れないと思うぞ？
依頼扱いなのでその戦闘で出撃した組には給金が出るので1割組預かりにするかわりに他9割を均等に分けている。まあ、給金が凄い額な訳で、1割取ったとしても、へ？そんなんで良いんですか？てな感じで、しかも1割でも意外と大金な訳ですぐに貯まる。
なにこれ、う～ん、何か時間操作できなくても
お釣りが大群で押し寄せそうなほど得している気がする。

まあ、細かい事は気にしない！
あ、そうだ。原作中は魔法関係者だけを招き入れるようにしてみようかな？
ふふふふふ、儲かるな！！
あ！でも信用できる奴だけだがな？

へ？花見？ああ、楽しかったよ。
途中酔って暴走した奴が何人か居たけどな！！

4話「妖界！？」（後書き）

主人公がチートではなくその周りを取り巻く環境がチート・・・？
何かおかしくなってきた。
つーか、なに変な世界を確立させている！！
・・・あ、僕のせいか！ハハハハハハハハハハハハハハハ！
！

5話「突然の訪問者」

ｓｉｄｅ白兵

俺は驚いている。そして焦っている。
ぬらりひょんが居る。いや、俺もぬらりひょんだけどさ？
・・・目の前に居るのはあの「ぬら孫」の総大将、ぬらりひょんだ。
厳密に言うと違う。まず何が違うか。奴良組は俺が作っている訳で、相手の方は昔から住んでいる所に少数のお手伝いの妖怪が居る位で、支部もそこまで無いらしい。まあ地域の会長みたいなもんだ・・・よな？

まあ、別にそこら辺はどうでも良い。
まず驚いている理由、ぬらりひょん達（リクオと薬師一派、原作では見たことのない女の子の妖怪とごつい背の高い男の妖怪ｅｔｃ、ｅｔｃ、８０人強居る）は麻帆良学園都市の近くに居を構えているらしい。

そこで問題が発生した。麻帆良の正義馬鹿、もとい魔法教師達が討伐作戦を打ち出したらしい。
何でも学園長とは一応旧知の間柄らしく、その作戦を反対したが押し切られたと言う事を知らせてくれたらしい。
そこで最近噂になっている京都の妖怪組織、つまり奴良組にはるばる足を運び、匿って貰おうとしたらしい。

焦っている理由。解る人には一瞬で解るだろう？
苗字が同じ、種族も同じ。どう思うよ？そんなんが行き成り現れたら。
それで焦っている俺、しかし

「いや～、偶然もあるもんじゃのう。ワシは他のぬらりひょんに会ったことなかったからな！！
初めてじゃわい、世界は広いんだか狭いんだか。
ご先祖が同じかもしれんしの？」

こんな風に流してくれた。軽いな！？

「で、あんたはどうして欲しいんだ？同属のよしみで出来る事なら何とかしよう。」

「うむ、ここに居る全員の保護をしてもらいたい。後は、リクオは友達が居るから麻帆良に通わせたいんじゃが、どうにか出来るか？」

「う～む、ここに居る全員の保護ってのは容易いが。リクオ君の学校の方がなぁ。」

「無理かのぉ？ふむ、どうしたもんか。」

あれ、そう言えば木乃香は学校に編入するんじゃなかったっけ？

「お～い、千。詠春呼んできてくれないか？」

「はい、解りました。」

・・・お、来た来た。

「如何しましたかって、今日はずいぶんとお客さんが居ますね・・・」

「ん？如何した。」

「ぬらりひょん、ですか？」

「おお、そうじゃよ。主の父親みたいに人間ではないわい。」

「ほお、そんなにてんのか？」

「似てるなんてもんじゃないぞい。もう殆どそのまんまじゃ。」

やべっ、何か会いたくなった。まあいいや、取り合えず事の顛末を咏春に言って木乃香と一緒に転入させる事が出来ないか聞いてみる。

「そう言うことですか、たぶん大丈夫でしょう。お父さんもあなたのことを知っているみたいですし。」

そう言うが早いか連絡を取りに言った。

「だとよ。良かったな。さて、この別荘の中を案内しなきゃあな？」

「そう言えばここは何なんじゃ？」

ああ、説明していなかったか。

・・・・・・・・説明中・・・・・・・・・・・・・・・

「ほお、それはまた凄いのう。」

「まあ家のほうは、この間作った屋敷でたりる・・・よな？朱剛。」

「何で俺に聞く」

「いや、建ててんのお前の組じゃん。」

「覚えていない！！」

「威張るな！」

ガシャッ、ガシャッ

「お、どうした？紅魔」

「主、刹那殿と木乃香殿が妖怪横丁へ連れて行って欲しいそうですが？」

そこには鎧を着た黒髪の青年が立っていた。

「ん、そ～か。あ～、千。確認してきてくれないか？屋敷の広さ、こないだ五個くらい作ったからあの中でどれが部屋数足りるか。」

「はい、それでは後ほどお伝えいたします。」

そう言うと人型変化を解いて大神の姿で走っていった。

・・・あいつ、デカク成ったな。

俺、乗れんじゃね？まあいいや。

「じゃあ、一番主要なとこ案内すっか！つ～か、紅魔、お前この中まで鎧着てることなくね？」

「いえ、これから巡回ですので。それでは」

「う～ん、あいつはどうも固いな。あ、そうだ。」

俺は神に貰った能力の一つ空間転移を発動する。
これは俺が手を振ると望んだ大きさの闇のゲートが出てくる。
そのゲートに手をつっこむと【誰でも人型変化薬】を取り出す。

「これは飲むだけで誰でも人型に変身できる。大型の奴とかは飲んでおいたほうがいいぞ？」

さて、じゃあ行きますか。この形も待っているだろうしな。
リクオっつ～新しい友達をな。

ｓｉｄｅぬらりひょん
面白い奴じゃわい。奴良　白兵、何か隠しとんのは見え見えじゃが。
まあ悪い奴じゃ無さそうじゃ。
それよか、この幼いながらもこの部下に慕われている様子。
誰もいやな顔をしておらん。いいところじゃのう。活気にあふれ笑顔が耐えん所。
こんなとこばかりじゃったらどれでけ良い事か。
それにしてもこの別荘とやら。凄いのお、見たことのない生き物も生息しておるし。
妖怪だけの世界みたいじゃしな、いやはや、ホントに何者なんじゃか。
とても孫と同い年には見えんな。

どっしりとした肝の据わり方、面構え。
・・・そういや、鯉伴ににとるのお。
あいつの周りにも笑いがあったな、ガハハハハ、これから楽しくなりそうじゃ。
む、良いキセルの店があるな、酒屋も有るのか。
ふむ、後で出来てみるかの？

ｓｉｄｅリクオ
すごい！！ウチにも妖怪はたくさん居たけどこんなに居るのみたことない！！
爺ちゃんも昔、沢山の妖怪を引き連れていたって言ってたけど、僕と同い年の子がここのリーダーなんて思えない。
かっこいいな～。
いつかあんな風になれるかな？
それとお友達が二人出来た。
これから楽しくなりそうだなあ。

ｓｉｄｅ白兵
そう言えばもうそろそろ旅に出ようかと思っていたりする。
俺は奴良組を日本だけに留まらせて置く気はねえ！！
まあ、別荘の中にだったらたとえ魔法世界からでも転移できるから、別に旅って言う旅じゃないけどな
帰ってこようと思えばいつでも帰ってこれるのだ！！

翌日、事情説明したのに、出ようとしたら木乃香達に泣き付かれた。
何故だ？

5話「突然の訪問者」（後書き）

相変わらず別荘はチートです。

ぬらりひょん出て来てしまった！！

後はネギまのぬらりひょんが出れば三大ぬらりひょん完成だっ！！

6話「いざ、旅へ！って、え！？」

ｓｉｄｅ白兵

何でこー成った？

え～、今晴明神社前で陰陽師君たちに囲まれている次第であります！！

つ～か、花開院家って本当にあんのね？

いや～、恐れ入ったよ全く。あれ？竜二じゃねえ？魔魅流もいるよ。

何でちびっ子まで総動員してんの！？

あ、そう言えばこないだ俺が木乃香達より2歳ほど年上だったことが解った、まあこの世代って1歳や2歳違ってもワカンネーもんだな。え、何で解ったか？

鴆に年齢審査薬とか言うの貰ったからな。

秀元だっけ？が前に出てきたそういえば、ぬらりひょんと羽衣ギツネのとき共闘してた奴も同じ名前だった気がする。

「お主、何用でここに来た。」

「いや、ただ通りかかっただけだけど？」

「嘘をつくな！！関西呪術教会の保護が有るからって良い気になるなよ！！」

秋房、いや～、怖い怖い。あの槍もう完成してんのかな？

つ～か、あの槍で来られると薄刀・針じゃ耐久度低すぎて耐えられないのだが。

祢々切丸じゃきっても・・・あれ、あの槍って式神を自分に憑かせて妖怪になるんだっけ？

じゃ、切れるかも。でもあんまり派手に暴れると詠春に怒られるか

らな・・・どうしよう。

「俺はサッサとここ通り過ぎて旅に行きたいんだよね。」

「お主の様な存在を外に出す訳には行かぬ！！」

「ぜやあああ！！」

うお！？なんだ？このオッサン、さっきまで隅のほうで震えてたと思ったら殴りかかってきやがった。
うわ、今度は薙刀か！？怖いっつーの！！
まあ、当たり前のように避けるがな！！
それにしても、これが霊力か、見稽古有ってよかったぜ。
技を作る才能もな？

「魔力、気、妖力、霊力。全部合わせて、『咸卦法』【壱式・白亜】」

おお、うまく行った！！けど、きついなこれ、練習しなきゃ駄目だ。
ん、髪白くなってる。なぜ？いや確かに名前付けたよ！？白亜って、今適当に付けたんだよ！？
まあいいや。
あれ？どうしたんだろうか。殆どの奴が気絶しちゃってるよ。
ああ、耐えられないのか。この圧力に
でもさすがだ、この爺さんだてに現頭首って訳じゃねーんだな。
ま、これで通れる様になっ、

「貪狼！！！」

っと思ったけど甘かったのかな？

振り向きざまに薄刀・針を横に凪ぐ。・・・これも白くなってるよ。
強度上がってるし。

「っつ！？」

・・・あ、ゆらだ。

ｓｉｄｅゆら
ありえへん。
何やこの妖怪、何か力を解放した思ったらみんな気絶してもうた。
私も立ってるのもつらい吐き出しそうや。
見た目は私と大して変わらん年なのに・・・
そう思っていると妖怪が立ち去ろうとしている。
ここで逃がしちゃ駄目や！！

「貪狼！！」

けど簡単に返されてもーた。こっちを睨まれた。
終わり、殺される。

「ガキなのに良く耐えるな？まあ良いや。収穫もあったし。じゃあな。」

その瞬間その妖怪は消えた。
助かった。

ｓｉｄｅ秀元
あの妖怪、今ここに居る人間で勝てる奴は居なかった。

本当にただ旅に出ようとしているだけで助かった。
ゆらが攻撃してしまった時はもう気が狂いそうになってしまった。
久方ぶりの本当の意味での死の危機
・・・はっきり言って1週間なにも喉を通らなそうじゃ。

ｓｉｄｅ???

「ふむ、おもしろいな。あやつ、今の力で私の部下が大半が気絶、意識が保てている者も立っているだけが限界か。」

晴明神社前を隠れてみていた者が居た。
黒い制服、長い髪。
そして凍るような冷たい笑みを浮かべていた。

「最近暇だからな。あとを付けてみるか。」

気絶したり、止めようとしているのだが動けない部下をほっといて・・・

知らないところで厄介ごとが増えている白兵であった。

ｓｉｄｅ白兵
さて、無事に京都から出たわけです。
パスポートとか戸籍は少し前から詠春に貰っていたからまずは、

「お嬢さん、何で俺の後をつけているのかな?」

「ほう、解るのか?」

あ、やべ。羽衣ギツネだ。

ちっこいけど。・・・いきなり戦闘とかに成んないよね？
まあ、負ける気はないけど。

「フフフ、私の物にならんか？」

・・・あれ？何か聞いた気がする台詞だな。
何だったっけ？まあ忘れるって事はたいした事じゃねえだろ。

「遠慮しておくよ。可愛いお嬢さんに誘われるのはそそるもんがあるけどな。」

・・・今の格好で言ってもなんかしまらないな。
ぬらりひょん化してるとなんか年齢が上がってるっぽい。
大人びた感じる、まあそれでも良くて１０歳くらいに見えるか見えないかだ。（今６歳）
・・・・ん？何か赤くなってるけどどうしたんだ？
ま、いっか。

「じゃあ俺はこれで、って、うお！？」

尻尾が俺を狙ってきた。

「殺すきか！？」

「死んでないじゃないか。それに私を無視するな！！！どこかへ行くなら連れて行け！」

「なんでだよ！！！何でお前が付いてきたがるの！？俺なんかした！？」

「い、いいから連れて行くのだ！！／／／」

なんだよ、そんな顔が赤くなるまで必死に。

はっ！まさかあれか！？俺の生き胆とか狙ってんのか！？

・・・怖い。つーかこのやり取りでエヴァを思い出すのは何故だろうか？

さてどうしよう、ここで断って乱闘か、後で生き胆狙われるときに乱闘か。

・・・乱闘しか選択肢がないや。今は疲れてるからな～はっきり言って戦闘はしたくない。

「・・・はあ、勝手にしろ」

ｓｉｄｅ羽衣ギツネ

「遠慮しておくよ。可愛いお嬢さんに誘われるのはそそるもんがあるけどな。」

・・・可愛いお嬢さん、は、初めて言われた。

何なのだこいつは、少し皮肉な笑みを浮かべながらこんな事を言うとは／／／

・・・これがじごろとか言う奴か

「じゃあ俺はこれで」

逃がすか！！

「うお！！殺すきか！？」

よし決めた！

「どこかへ行くなら連れて行け！」

こいつを私の物にするまで付きまとってやる。

その頃、京都で

「羽衣ギツネ様～、何処ですか！！」「え～い！！探せ探せ！！！」

「羽衣ギツネ様～～～～～～～！」

あちこちで妖怪が目撃されたという。

ｓｉｄｅＯＵＴ

「それで貴様は何故旅をしているのだ。」

「いや、百鬼夜行募ってんだけど。俺としては日本の妖怪とかだけじゃなくて外国まで手を伸ばそうと思っている訳だよ。そろそろ構成員も増えてきた事だし。」

何故か仲良く雑談している二人。

「つーか、お前パスポート持ってんの？」

「これの事か？」

「・・・なんで持ってんだ。まあ良いや。そう言えばお前本当について来て良いのか？」

「なにがだ？」

「いや、仲間とか居ないのかなと思って。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・大丈夫だ。」

「目を背けるなよ！？明らかに大丈夫じゃねえだろ！つーか汗凄いぞ！？」

「だ、大丈夫と言っておろうが！！」

こんな感じで色々間違った方向に暴走するのであった。
ちなみに、こいつの仲間には俺が式神で鳥を作って事情と俺の妖界への紹介状を送っておいた。

・・・まあその後は千やカラスに任せるか！！
がんばれ、千、カラス！！

6話「いざ、旅へ！って、え！？」（後書き）

何でゆらが耐えてるんだよ！！と言う質問に対しては。
これからの展開上こーしたほうが良かったんです。ごめんなさい！！ｏｒｚ
と答えさせて頂きます。
・・・ごめんなさい

つーか羽衣ギツネのキャラが崩壊、しかもフラグが・・・

7話「猫と妖精、ポロリもあるよ？（いや、そう言う意味じゃなくて）」

ｓｉｄｅ白兵
今、アイルランドのあたりにいまーす。
そして猫に囲まれている！！
いや～、幸せ～。

・・・なんか殺気が。

「おい、どうしたんだ？」

「・・・ふん！！」

・・・なんだ？撫でてもらいたいのかな？猫みたいに。
ああ、そう言えば羽衣狐は何か弥子と呼べって言われた。・・・野狐じゃなくて？
一応撫でておいてやるか。

「・・・／／／／／」

まあ、そこらへんは置いておこう。
それより今の状況報告からな？

え～と、まずイギリスに行った。
財布落とした・・・はあ
それでそこの町でバイトや仕事して金を稼いだ。
・・・結局仲間探しながらやってたから４ヶ月ほど滞在していた。
それから徒歩でアイルランドまで行った。これまたあちこち寄り道していたから１ヶ月かかり、ここに来てからも５ヶ月ほどになった。

するとあら不思議・・・・お正月に成っちゃいますよ！？
と言う訳で、今また帰りの金をためている。せめて正月は家でおせち料理とか食べたい。

ああ、でなぜ猫に囲まれているかと言うとケット・シーのネコ耳少女、フラウが仲間に入ってくれて、猫を触らせてもらってます。
後もう二人仲間になった・・・プッ！！
あ、ごめんなさい、いや～、一人ね名前がゼッテ～ウケ狙いだろ？
てきな奴が居るんだ。
ピクシーの木下　別科夢・・・
何故に漢字、何故に問題がありそうなペンギンが思い浮かぶｗｗｗ
つーかこいつの喋り方はたまに変、しかも馬鹿。ま、後で解るか。

そいでもう一人、デュラハンのラルカ。首無し騎士の男。
【誰でも人間変化薬】を飲ませたら首くっついた。
・・・首無しもいけるな。帰ったら実験してみよう！！

え、なに、話の流れは解るけれどどうして文章にしないかって？
だって、別に特筆するべき事はないし。
あ、ちょっと前に困った事があったな。

回想ＧＯ！！
これは買出しに出かけるとき。

「ラルカ、お前は変化できんのか？ここから先困る事になるぞ？」

そう　弥子が言う。
確かにデュラハンは元々そう言う妖精らしいが、少し困る。

「・・・接着剤でもつけるか！！」

「それは酷いです～。ご主人～。」

「そうですよ。主、さすがのラルカくんでも剥がす時痛いでしょう。ここは縫い付けましょう！！」

「いや、物騒な事言わないで！？そんな事したら俺死んじゃう！！」

・・・言わなくても解る通り、最後から二番目の意見が木下の意見。文面だけ見てればこいつＳか？と思うかもしれないが、こいつは何故か本気で痛くないと思っている。

うん、なんとたとえればいいか。あ、あれだ、よく子供とかが、こうすればきっと大丈夫とか思っている時の目だ。

「よし、マフラー持って来い、それでうまく乗せよう。」

・・・５分後・・・

「出来た、大変だったな。」

「すいません迷惑かけて。」

「よし、じゃあ。ラルカとかい出しいってくる。」

店

「・・・今日は混んでるな、サッサと済ますか。あ、ラルカそのケ

チャップとってくれ。」

「あ、はい」

あれ、なんか崩れそうに成っているぞ！？

「「うわあ！？」」

ケチャップが落ちてきた。

バサバサバサバサバサバサ！！

ポロリ、ゴトッ！

「・・・あれ、何か不吉な音が。」

「くくくくくく、首がアアアアアアアア！！！」

「うわ～お、大ピ～ンチ！？」

俺はそう言うとラルカの首を持って退散した。

え？胴体？ちゃんと俺の後ろについてきてる。

まあこんな感じの事があった。

あと、報告は、咸卦法だが、壱式は完璧に制御できるようになった。

そして咸卦法は新しい段階にきている。

そして新しい拳法を作り、剣の練習をしていた。

完成形変体刀が全て出せるようになった。
忌々しき神から、
～創ったからくれてやろう。～
と、むちゃくちゃ馬鹿にされている気がした。まあ良い、無駄は嫌いだから貰ってやろう。
・・・さて、今月中には帰れそうだな。

8話「ひっさしぶり～！！」

ｓｉｄｅ刹那

・・・寂しい。

ウチには憧れている人がいる。

その人はいつも誰かに頼られてて、いつも周りに優しくしてくれる。

いじめられていたウチにも声をかけてくれて、これまで長とこのちゃん、師範ぐらいしか私の事をちゃんと見てくれへんかったけど、

あの人が来て周りの世界が一変した。

だから、寂しい。

はあ、白くんはよう帰ってきーひんかな。

これが彼女の初恋であることは今は本人にも解らない。

解っているのは初めての親友やその父親、大勢の、人ではないけれど人より明るい心を持つ家族（奴良組）の人たちだけだ。

まあ、つまり人と接する経験が無いのでＬＩＫＥかＬＯＶＥの違いが解らないのでした。

「せっちゃ～ん！あそびいこ～。」

このちゃんが呼んでる。

ｓｉｄｅ木乃香

・・・せっちゃんが暗い。

何故かはわかっとる。白くんや！

白くんは時々帰ってくるって言っておきながら全然帰ってきーひんのや！

お仕置きやお仕置き！！
あんなに、せっちゃんが待っとるゆーのに。
でもどうしよう、そや！
遊びに行って元気出してもらおー！
奴良くんや雪ちゃん、瑠璃ちゃんに氷麗ちゃんも誘っていこーかな？
そうと決まれば、

「せっちゃ～ん！あそびいこ～。」

ｓｉｄｅ白兵
そういや、今原作で言うとどの位なんだろうか？
あれ、でも木乃香と刹那とリクオが少し前に５歳になったつってたか？
ん～、原作ではそろそろ木乃香がおぼれちゃう位の所か？
・・・あの事件があるから変な距離になっちゃっ「～～？」たんだよな、あの二人。
まあ原作と違って誰かが護衛してるだろうけど。

あれ、そうなると刹那って修行どうすんだ？「～～～～！！」
あの事件があったからこそ、より一段とがんばるんだっけか？
まあそんな事なくても修行してたけど、まあ大丈夫だろう。

「聞いておるのか、白兵！！！」

「うおわ！？あ、ごめん、まったく全然、微塵も毛ほども一言たりとも聞いてなかった。」

ブチイッ！！！！

「貴様はあああああああああああああ！！！！！」

ズギャギャギャ！！

「うをおおお！？ちょ、待って！！冗談冗談！だから尻尾で攻撃すんな！あ、聞いてなかったのはホンとだけど。」

「貴様は謝るのか馬鹿にしているのかどちらだ！！！！」

「え？う～ん、どっちも？」

「殺す！！」

ビュッ！！

尻尾が俺に向かって攻撃してきている。

↓どうする？

a，逃げる

b，受けて怒りを静めさせる

c，別科夢を投げつけて軌道をそらす

d，捕まえてもふもふする

・・・ここはあえてcをやってからのdだな！！

「別科夢～。」

「なんでしょうか？マスター。」

ガシッ！！

「へ？」

「ぜりゃああっ！！！！」

ビュンッ
ガシュッ！！

「ブベラッ！？」

ふん、幾分か威力が弱まったな。
あ、別科夢はいいのかって？
大丈夫だ、あいつは有り得んほど頑丈だから！！
つー、訳でもふもふさせてもらうぜ！！

「な、ちょっ！！やめろ、お、おい！？ひゃうっ！！／／／」

・・・なんかエロいな。つ～かキャラが総じてぶれてるよな？こいつ。
原作の面影とか全然ねーぞ？

「お、い／／／やめて、ひゃああ！！！／／／／」

・・・なんか犯罪の匂いがして来た。
もうやめよ。

「で、何の話だっけ？」

「ふう、いや飛行機が来るまでどうするのだ？」

そう、やっと帰りの代金が貯まったので飛行機の予約をした。
それが今日なのだがあと2時間位の時間がある。

「あ～、本屋でも行くか？」
「まあ、何でもよいがな。」
「本屋行くんですか？」
別科夢が起き上がってきた。
つーかこいつの体何でできてるんだ？
「あ、俺たちも行きます。」
「本、一回読んでみたかったのよね～。」
「じゃ、行くか」
あっちに何時につくかな？
着けばそこから転移すればすぐに到着だし。
まあ、昼頃には着くだろ。ケータイ持ってないから連絡できないし。
みんなをびっくりさせる為に黙って行くか！
でもまあ、楽しみだな。
でもどうしようかな。今回の収穫は３人か。
帰ってしばらくしたらまた出ようかな？
魔法世界も行って見たいし。
ｓｉｄｅ木乃香
みんなで川まで来てあそんどる。
やっぱみんなであそぶんはたのし～な～。

そういえば白くんが居る時よくかくれんぼしたけど一回もかてへんかったなあ。
・・・今思うと魔法でもつかっとったんやろか？
う～ん、あ！ワンちゃんが流されとる！？
助けな！！

「このちゃん！？」

「きゃっ！」

「このか！？わわわど～しよ！」

「私、泳げない。」

「僕が行くよ！」

「そんな！駄目ですよ！？リクオ様！！こうなれば凍らして！！」

「わ、わかった！！」

「二人とも駄目だよ！？」

う、しずむ

「このちゃん！！！」

バシャンッ！
せっちゃんが飛びこんできた。
けど一緒に流される。

「無茶すんなよ。おまえら」

なんか温かい。なんやろ？

「ホント、心配かけさせやがって。」

「白くん」

「つーか、お前らもお前らだろ！！天下の奴良組が溺れてる女の子一人助けられないってどう言う事だ？ったく」

「「「すいません、返す言葉もありません」」」

「ま、無事でよかったな？よし、体が冷えるから帰るか！！」

元から好きだったけど。せっちゃんとは違う好きだったんと思う、けど

・・・せっちゃんが白くんの事が好きになったの、解った気がした。

8話「ひっさしぶり～！！」（後書き）

羽衣狐キャラ崩壊、木下別科夢まさかの防御力チート。
そして、木乃香フラグ設立！！
きっとこの後
「おとーさまー、ウチ白くんと結婚する～」
とか言って詠春は頭痛に悩まされる事にきっとなる！！
でも刹那も白兵が好きだからな～

9話「悩み」

ｓｉｄｅ刹那

ウチが弱かったから、あの時このちゃんを助けられへんかった。

だからウチはつよーなる！！

「で、何で俺の所くんの？」

今白くんと紅魔さんと斬牙さんがご飯を食べていたので相談している。

「白くん強いし。」

「いや、別に強ければ教えんのがうまいって訳じゃないからな？」

「白くんだったらきっと、どっちもできる。」

「・・・俺忙しいから紅魔、あとよろしく」

「・・・はい」

白くんに教えてもらいたかったのに。

「あと、あんまり気張りすぎるなよ？木乃香と距離おくとかはやめろな？」

「で、でも」

「何だよ。みんなで遊ばないのか？刹那はまだ俺の事かくれんぼで

見つけたこと無いだろ？」

「それはテメエが畏使ってるからだろ？」

「ライオンはウサギを狩るときにも全力を出すんだよ！」

「お前が隠れてる側だろ。このウサギ」

「やんのか、ああ！？」

「やってやろう、じゃんかよ！！」

バキッ！！

・・・何やってんや、この二人。

「刹那殿、こうなるとしばらく納まらないのでこちらへ。」

「あ、あのよろしくお願いします！」

「はい。」

「「こんの、へな猪口野郎がああああああ！！！」」

ゴキャッ！！

ホントに何やってんや、この二人は

ｓｉｄｅ白兵

「お～、いてえ。」

「そう思うんだったら喧嘩なんてしないでください。長」

今雪に怪我の手当てして貰っている。

「・・・なんか面倒ですね。凍らしちゃっていいですか？」

「駄目に決まってんだろ！？つーか、お前なんでもかんでも凍らせようとすんのやめろよ。」

「良いじゃないですか、楽だし。はい、終わりです。で、どうだったんですか？刹那ちゃんは」

「一応、言っておいたんだがな。まあこれ以上悪くはなんないんじゃないか？」

「そう、良かった。たまにはやることやるんですね。長」

「なにそれ、ほめてんの？けなしてんの？」

「長って変なところで鋭いのに、肝心な所で鈍いから。」

「俺って鈍いか？どこら辺が鈍い？」

「人の気持ちを考えないでどんどんハーレム要員が増えている所とかですかね？」

「はーれむよういん？何だそれ。俺がいつハーレムなんぞ作った？」

「・・・この鈍さは一生かかっても直らない気がします。」

なんか今日は雪の毒舌エンジンが最高潮だ。
俺なんかしただろうか？

「あ、そういえば今朝仕掛けた落とし穴誰か引っかかってないかみてこよ。」

「またですか。・・・今のうちに治療の準備しとこ」

ん？なんか雪が言った気がする。それになんかやかん用意してるな。
まあ良いか！

そのあと氷付けにされた百鬼夜行の長とその周りで焦っている氷麗とリクオが目撃された。
お湯がすぐに出てきたのは何故か知らないが。

9話「悩み」（後書き）

雪は人の行動がよく読めるようです。

番外編「咸卦の極意」（訂正）（前書き）

本文に3行ほど付け足しました。

オリジナル要素あり、要注意

番外編「咸卦の極意」（訂正）

ｓｉｄｅ白兵

やっと、やっと完成した！！

え、何が完成したかって？

ネギが闇の魔法を習得するのに使っていた巻物を真似た物が出来たのだ！！

これで俺の咸卦法も安泰だ。（実験したら人間でも出来た）

咸卦法【壱ノ式・白亜】【弐ノ式・白神】

裏・咸卦法【壱ノ式・黒金】【弐ノ式・暗黒】

そして、もう一つ、真・咸卦法【零ノ式・無我】これはこの巻物では覚えられない、直伝の奥義だ。

へ？なんか中二臭い？

我慢してくれ、思いつきとその場のテンションでつけたから。

ああ、別に失敗しても死にはしない。

あくまでちょっと厳しい修行用だ。

・・・ちょっと、な？

まあそう言う訳で実験で周りに被害でたら嫌だから山の奥まで来たのだが、

「何だ？このトンネルは」

知らないトンネルだ。

こんなもん作らせた覚えは無いんだが。

というか、どこに繋がってんだ？
う～ん、この別荘の中は広くする事は出来ても建物とかの建造物は自分達で建てない限り建てられないはずなんだが・・・
ウズウズ・・・
「まあ、覗くだけだし良いよな！！」
そう言って俺はトンネルの中に入っていった。
これが何のトンネルなのかも知らないで・・・
「お？ここが行き止まりか・・・いや、変な魔方陣があるな。魔力流してみっか！！」
魔方陣が発光した後にはどこにも人影は無かった。

ｓｉｄｅ？？？
「なんだ？これは」
そこには若い眼鏡をした青年が立っている。
「昨日まで無かったはずだけど」
青年の前にはトンネル、いや、正確には入り口だけですぐそこに行き止まりがあるのだが。
それにしても不自然だ。
この森には修行の為によく来ているので良く解る。

ここの地盤は相当固い。1日や2日でこんなものが出来るはずが無い。

「調べたほうが良いんだろうか？いや、危険かもしれないし。取り合えず町に行って警備の人達に言ってみるか。」

「む、転移の術式だったのか？つーかあんなゲート開ける奴ウチの組にいたか？それよりココどこだろう」

っ！？誰かが転移してきた！！転移用の儀式場だったのか！？

「お、あんた、ココどこだ？」

「・・・は？」

・・・・・・・・・

「で、君は故意にココに来た訳ではないと。」

「おいおい、君って何だよ。子供扱いすんなよなー。俺は見た目よか若くないぞ～（まあ、精神的に見ればだが）。」

「まあ、良い。ココはメガロセンブリアだよ。大体この名前だけで

解るだろう？」

「はあああああああああああああああああああ！？」

ｓｉｄｅ白兵

「はあああああああああああああああああああああああ！？」

あ、すいません。あまりの有り得なさに驚いていました。

なに、あの別荘チートだとは思ってたけどまさかここまでとは。

魔法世界についてしまった。

・・・それにしてもこいつ、どっかで見たことあんだよ。

なんか、こう、引っ掛かるというか。

あ、名前知ってるかも。

「おい、あんた名前は？」

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。」

はい、なぜ？

おい！作者っ！？どう言う事だ！！

って作者って誰だ！！

つーかなんでだ？

なんでガトウってばこんなに若いの？

なんで、ねえ、誰か教えてよ！！！

『ギャゴオオオオ！！！』

あ？うっせ～よ。

何が、ギャゴオオオオ、だ！こちとら状況整理でいそがしんじゃボケナス！！
えーと、つまりはタイムスリップか？
「な！！この泣き声、竜種か！？なぜこんな所に！！」
「ギャアアアアアアアア！！！」
「おい、君。逃げるぞ！！！」
おいおい、うっせ～な。
竜ごときに紅き翼が逃げんなよ。
あれ？でもまだ紅き翼じゃねえのかな？
う～ん？
「おい！！くっ！？」
灰色の角が二本ある竜が出てきた。
「な、で、でかい！！」
つ～ことは咸卦法は使いこなせないのか？・・・ニヤリ
それじゃあこの巻物の実験体になってくれるというわけだ。
これを全て習得できればガトウの死亡フラグもボッキリと良い音立てるだろーなー！！
ヒヒヒヒヒッ！！
そうすればガトウが魔帆良に来るかも知れんし。
つ～か、師匠って呼ばせて「俺にもう一度会いたければこれから起きる事件を終わらして麻帆良に来い！」とかいって見ても面白そうだ。

「ガアアアアアアア！！！」

「ちっ！うるせえぞ、トカゲ！！『裏・咸卦法【壱ノ式・黒金】』」

グシャッ！

「ふん、俺にたてつくからだ！」

『裏・咸卦法【壱ノ式・黒金】』混ぜ合わせるのではなく、あえて反発させ、そのエネルギーを無理やり取り込む。
こうすることで、その力を少し開放だけで爆発的な力の奔流が飛び出し、遠距離戦を可能にするのだ！！
と、言うわけでトカゲのミンチ出来上がり！！

まあどうでも良いや。さてガトウ改造計画どうしたもんかな？成功すればナギ達にも負けないだろうけど
つーか俺って帰れるのかな？
またあれに魔力を流し込めばいいのか？

そう考えていたとき。

「あの・・・」

「あ？なに」

「弟子にしてくれ！！」

「へ？」

ｓｉｄｅガトウ
圧倒的だ。
今のはなんだ？
咸卦法、と言っていた。だが
俺も咸卦法使うだけどまた異質なものだ。
・・・知りたい。

「弟子にしてくれ！！」

「へ？いや、まあいいけど。」

何か悩んでいるようだ。

「あ、そうかそうすれば、うん。じゃあ、この巻物を使って修行してみろ。俺は行かなきゃなんないとこが有るからな。使い方は簡単、開くだけ。」

「これを使って？」

「お前にはきっとこれから試練が訪れる。だから乗り切ってまた俺に生きて会って見せろ。そうしたら最後の咸卦の極意を教えてやろう。」

「会って見せろって。どういう意味だ？」

「そうだな。だいぶ後だが、たぶんこの世界で大戦が起きる。それが終わったら、旧世界の麻帆良学園と言う所に行ってみろ。」

「は？」

「まあ気にすんなよ！！きっと会えるさ。弟子一号ガトウ君。君にとっては短いようで長い付き合いになる事だろう。」

「え、ちょっと！！」

嵐みたいな人だった。ぱっと現れ、すぐに消えて。
だけど、きっと忘れることは無いんだろう。
大事な初めての師匠だ！！

そうして巻物を広げる若者は勇者となり。
少年の知る物語からまた一歩遠ざかるのだ。

番外編「咸卦の極意」（訂正）（後書き）

原作ブレイクフラグＩＮ過去！！

・・・文才が無くてごめんなさい！！

質問が多かったのですが、ココでは白兵がタイムパラドクスを行っています。

１０話「旅立ち」（前書き）

短いかもしれません

１０話「旅立ち」

ｓｉｄｅ白兵

今日は木乃香が麻帆良に行く日だ。

俺も出来るだけ早く麻帆良へ行きたい。
ガトウが助かったのか助かってないのか早いとこ知りたい。
詠春に聞けば早いのかも知れないが、そうも行かない。
俺がガトウの師匠なんてあいつが知ると気が狂うほど混乱するだろう。
あの巻物には変化してない時の俺がインプットされてるし、俺は詠春の前で変化をといた事は２回位しかないので、もしガトウが紅き翼にあの巻物の俺を見せていても解らないと思う。
・・・この別荘持ってって刹那もつれてさっさと麻帆良に転入しちゃおうかな？

いや、ここは我慢所だ。
俺が今から行けば色々とおかしな事になる可能性がある。
ガトウが俺にタカミチの指導させようとしたり、じじいの陰謀でエヴァと戦ったり。

俺は原作の刹那と同じタイミングで行こう。
それが最善だ。

ｓｉｄｅ木乃香

今日ウチはおじいちゃんの所へ行くことになった。
でも行く前にちょっとした作戦があるんや！

「せっちゃん、これでええかな？」

「このちゃん、怒られないかな？」

「大丈夫やえ～、白くんはこんなことで怒ったりせーへんよー。」

『木乃香、もうそろそろ行きますよ～。』

「いこ、せっちゃん」

「うん」

・・・・・・

「それにしても、木乃香が小学校か。早いものです。」

「オヤジ臭いぞ？詠春。」

「おや、そうですか？」

白くんが来た！

「白く～ん！」

「あ？なんだ」

「ちょっとこっち来て～」

「？」

よし、こっちにきたで！

ヴォン！！

「なっ！？捕縛結界！！」

「「引っ掛かった～。」」

「お別れの仕返しってか？」

「ううん、そんなんちゃうよ？」

「は？じゃあ何だよ」

「思い出作りやで？」

「？？」

ふふふ、こまっとるこまっとる。

「せっちゃん手伝って」

「うん」

カキカキカキ・・・・

「うん？この魔方陣は・・・っておい！！何でこんなもん覚えて！？
あっ！だから捕縛結界か！！チキショ～、抜け出せね～！！！」

もう遅いで。昨日から魔法先生に教えてもらっとったんやから

「くっ！刹那、やめろ！！」

「いや、ウチは、その／／／／」

せっちゃんかわええな～。恋するとやっぱきれいになるんやね。

「っ！？え、詠春！！！」

「まあ、我慢してください」

「後で殺してやるぞ！！詠春！と言うかそれでも親か！？」

「親だからこそ、ですかねえ？」

「じゃあ、行くえ？」

「ごめんな？白くん／／／／」

「や、やめろ～！！」

チュッ
チュッ

仮契約（パクティオー）

「「／／／／／」」

「くそ、なんでそうなるかな？つ～か木乃香が俺の主って言うのは5億歩譲ってまあ良い様な良くない様な気がするが」

「結局許してへんで？」

「何で刹那が従者なんだよ。つーか、お前らで仮契約してりゃあ良かったもんを。」

「む～、ええやん。損にウチらとキスすんの嫌だったん？」

「あ、あの、ごめん白くん。」

「・・・美少女が涙目で迫ってくんのは反則だろ。つ～かトラップ王の俺がトラップに引っ掛かっただと？そんなことあっちゃいかんのに・・・・・」

・・・なんかへこんどる。
そんなに嫌やったんか？せっちゃん泣きそになっとるえ？

「うっ、ひっぐ」

「うおわ！？刹那！！な、泣くな。泣くなって。そんなお前らが嫌いってわけじゃなくてだな？」

「うう、ご、ごめんな？白くん、も、もう近づかへん、から。うわ～～～ん！！」

「せっちゃん！！もう、白くんのバカ～～！！」

「ちょ、まっ！って、うわ！？え、詠春！？お、落ち着こうか。俺が悪いわけじゃなかろう！？

へ？よくも木乃香を泣かしたなって？いやないてたのは刹那で・・・嫌、待てよ！！ちょ、やめろって！なあ、ちょっ！？うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

そんなこんなで慌ただしく木乃香の旅立ちは終わった。

ＰＳ．　刹那は泣き止んだけれど機嫌が直らなかったので木乃香が説得して何とかなりました。

・・・白兵と夜一緒に寝ることと引き換えに

仮契約カード

称号：陰と陽を結びし者

番号：０

色調：銀

徳性：希望

方位：北

星辰性：北極星

アーティファクト：天之尾羽張

詠春に見せたら「このバグキャラめっ！！」って言われました。

なんで？そんなに珍しいの、このアーティファクト？

１０話「旅立ち」（後書き）

カオス、もう何か解んなくなって来ました。
さて次回はかなり時間が飛びます。

番外編2「紅き翼」（前書き）

途中オリジナルの魔法あり

番外編2「紅き翼」

ｓｉｄｅ白兵

「なんか、暇だ。」

木乃香が出て行って2ヶ月、本当だったらリクオも行っていた筈だったが向こうの正義バカ共がまだぬらりひょんのこと探しているらしく、変化が出来るまでここに留まらせる事に。

しかしあまりうまくいかない。妖力こそ沢山あるのだがどう言う事だろう。

原作じゃあ怒った（？）時に変化してたような。

一応剣術は教えている。祢々切丸はリクオに預けている。

あと、もし人間に襲われても良いように俺が作った刀を渡しておいた。

まあそんな感じで散歩をすることに決めた。

「ああ、暇だ。これ以上なく暇だ。つーか眠い！！」

ああ、駄目だ。ちょうど原っぱだしここで寝るか。

コンッ！

「いたっ！？あ？なんだ、これ、鍵？」

「白兵くーん！！」

「ん、どうした。リクオ」

「うん、なんか探検してたらデッカイ門があったんだ。だから知らせようと思って。」

・・・・あれ、なんかそんなこと前にも無かったか？
なんですか、また時空旅行フラグですか？
・・・まあ、あれだな。仕方ないよ。うん、きっとフラグが建ったらやらなくちゃいけないんだよ！
い、いやいや、決して暇つぶしになるっ！！とかじゃないから、絶対そうだから！！！

「よし！！危なくないか見に行くぞ！！そう、これは仕方なくだ！！」

「・・・・千くんとかに言っておいた方が良いような気がしてきた。」

「させるかぁ！！」

そう叫ぶと何処からとも無く縄と猿轡を出しリクオを拘束した。

「んん！？むごがご！！！！！！」

「なにいってんのかわっかんねーなー？フハハハハハハハハ！！」

・・・・・・・

・

「よし、ここか」

降り立つとリクオの縄を解いてやった。

「どうせ来たって鍵が閉めてあるから入れないよ。」

「む、鍵？」

鍵、鍵か。うーん、なんか心当たりが

あ、さっきのか！

「開くかな？」

「何で鍵持ってんの？」

「気にすんな。気にしたら死ぬ」

「死ぬの！？」

う～ん。

ガチャリッ

あ、ほんとに開いちゃったよ。

冗談だったのに

「まあ、開いたから良いか」

「・・・・・なんか、これすごく危ない気がしてきたよ。」

「気にすんな！よし、開けるぞ！！！っと、その前に変化を解いておこう・・・

よっしゃ！いくぜ！！」

「やっぱり僕も行くの！？」

「あたぼーよ！！」

「いやだあああああああああ！！！」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

ｓｉｄｅガトウ

・・・・デジャブだ。

前にもこんな事があった。

「・・・昨日こんな物ありませんでしたよね？」

アルビレオ・イマ、通称アルが言う。

「考えんのめんどくせーから取り合えず攻撃しちまえば良いじゃねえか。」

「そうだ、ナギの言うとおりだぜ！こんなもんラカンさまがぶっ壊してやらぁ！！」

「お前ら、その危険な思考どうにかならんのか？」

確かに、危なすぎる。やろうと思えば即やる奴等だからな。

「攻撃すんのは待ってくれ。なんとなく心当たりがある。」

「心当たりが？ガトウ、もしかして少し前に話した師匠と言う方ですか？」

「あ？本体がくんのか？じゃあ出とかないといけねえな」

「な！？し、師匠！」

「この方があなたの師匠ですか？」

「分身だよ。つーことで始めまして。ガトウの師匠です。」

・・・・軽い、軽いですよ。師匠

「・・・・師匠の師匠。と言うことは大師匠？」

タカミチもなんか変なことを呟いている。

「強いのか！？つーか、俺と戦え！」

「いやいや、俺オリジナルより力劣るから。だったら今から来るオリジナルと勝負してろよ。」

「よっしゃ！燃えてきたぜ！！」

「俺も参戦してやるぜぇ！」

ナギにラカン、お前もチートやらバグやら言われてるけど師匠も十分強いからな？
そんな事を言っているうちに門に光が灯っていく。

「よお、久しぶりだな。ガトウ。」

久しぶりの再開は
飛び蹴りで始まった。

「ぐはっ！？」

「見たかリクオ！これぞ奴良家一子相伝フライング妖怪ヤクザキック！！」

「ちょっと！？何やってんの！！」

「つーか、ガトウ、お前ちゃんと神経張り巡らしとけよ。そんなんじゃ駄目駄目だな。」

・・・本体も分身も対してやる事が変わらない。

「なんか。すごい方ですね？」

「ガトウを強化も何もしていない蹴りで吹っ飛ばすとは・・・」

「「強そうだな！！」」

お前らは静かにしてろ。

「よう、本体。」

「よう、分身。
さて、記憶共有だ。」

・
・
・
・
・

「ふむふむ。咸卦法【壱ノ式・白亜】は完成。裏・咸卦法【壱ノ式・黒金】もＯＫと。
で、【弐ノ式】もそれなりに出来ている。かなり強くなっているんだな。」

「いえ、そんなことは。」

「それで、今は戦争に参加中。
ふ～む、まあがんばれとしか言い用が無いのが困るな。
まあ、なんだ。手合わせでもしてみるか？」

「「先に俺たちとしてくれよ！！」

「うるさいぞ。ナギ、ラカン。」

「「何で俺たちの名前知ってるんだよ。」」

「ガトウが愚痴を言っている記憶が分身の中に有る。
まあ良い。ガトウ、完成した【弐ノ式】見せてやるからちゃんと見

てろよ？」

「はい！」

「よっしゃ！！どっからでもかかって来いよ！！咸卦法【弐ノ式・白神】！！」

そこには瞳の色以外が全て白になった師匠が居た。

ｓｉｄｅリクオ

・・・見えない。早すぎでしょ！行き成り消えたと思ったら赤い髪の人の前に現われておもいっきし殴ったと思ったら次はでかい人の前に居る。

「くっそ！来れ、虚空の雷、薙ぎ払え【雷の斧】」

「むっ！？来れ、混沌の闇、喰らい尽くせ【闇の斧】」

「今だ！！斬艦剣！！」

「ちっ！！流石千の呪文の男に千の刃！一人じゃきついか！？」

あ、また消えた。

「はっ！殴り合いだあ！！」

「上等！！オラオラオラ！！」

「ラカンともども焼いてやる！！

契約により我に従え高殿の王、来たれ巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆

！！

百重千重と重なりて走れよ稲妻！！

【千の雷】！！」

「裏・咸卦法【弐ノ式・暗黒】！防御壁展開」

そう叫ぶと雷が届くギリギリの所で白兵くんの周りに黒い円状の塊が出てきて身を守る。

「ぐぼはっ！？てめぇ！ナギ！！いつか殺してやるぞ！！」

そう言って筋肉ムキムキの人は墜落していった。

「はあ、回収してくる。」

「お願いします。詠春」

ん？詠春？

「何をしておるんじゃ？」

「おや、ゼクト。今日の夕飯は取れましたか？」

「うむ、竜種がおったから狩ってきた。」

僕より少し年上位の男の子が来た。

「それより、誰じゃ？あれは、相当強いのう」

「師匠の師匠らしいです。」

「ふむ、ガトウが使う普通でない咸卦法もあやつが考え出したのか。」

「ええ、そうみたいですね。だとしたらすごい事です。普通の状態でも、究極技法と言われているのに、それをもう一段階昇華させるなんて」

「じゃからピンチの時にしか使わないんじゃな。師の開拓した物を見せて自分が作り上げた物だと勘違いされるのが嫌なんじゃろう。」

「まあ、ガトウらしいですね。」

黒い円が解けた。
そこにはさっきと正反対で真っ黒の影のような白兵君が居た。
目は紅いままだが

「これの状態であれば魔法レベルの破壊力の遠距離技が出来る。」

そう言って取り出したのは

「【斬刀・鈍】よしっ！行くぜぇ！！月牙天衝（笑）！！！」

「（笑）って何だ！？くっ！【雷の暴風】！！」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！

・・・・・・白兵くん、怖いよ。

番外編2「紅き翼」（後書き）

続く！
もう一度タイムリープ！！
ということで次回も紅き翼編です。

番外編3「リクオ」

ｓｉｄｅ白兵

結果から言うと

勝っちゃった♪

ナギに

いやー、最期は俺が詠唱しないで月牙天衝（笑）撃って、焦ったから雷の暴風で応戦しようとしたからな。

まあ、当然俺が競り勝つわけで・・・

「「もう一回勝負しやがれ！！！」」

こんなウゼェ事になってやがる。

「うっせ～な！！さっきから、今ガトウに修行付けてんだよ！！」

「そうですよ。ナギ、ラカン。ちょっとは静かにしなさい。」

「そんな事言ったってよう。俺は明らかにこいつのせいで脱落したんだぞ！？」

「じゃあお前ら二人で戦ってれば良いだろうが」

お、詠春。それは今言っちゃいけないだろう。

『『よし！行くぞぉ！！』』

・・・・・・・・・

「ガトウ、もうちょっと力を抑えてだな・・・・」

「こうですか？」

「夕飯作りましょうか。詠春」

「・・・・失言だったな」

「バカじゃな。」

「白兵君！あれ良いの！？すごいことになってるよ！！」

「いや、いつもどうりですから。」

「取り合えず危ないからタカミチもリクオもこっち来い。」

え？皆、順応しすぎだって？良いんだよ。いちいち構ってやるほど俺のテンションはあがらねえ

・

・

・

・

・

「つーかお前仲間になれよ！！」

テンションたけーな、おい！

「俺からもお願いできませんか？世界の危機なんです。」

・・・そう言えばガトウって最終決戦に居なかったな。
今のチートガトウだったら居たほうが当然戦力に成る。
はっきり言って俺の出番なんぞ無いと思うんだが。
しかもこんな所で顔が割れんのもな。
でも、どうしたもんかな～。
つーか、俺が残るにしてもリクオは返さないとな。
・・・・あ、殺気。

「「「「っ！？」」」」

シュッ！！！

おお、流石最強軍団。
一斉にばらけやがった。

「数は４０００位でしょうか。・・・・ずいぶんと多いですね。」

「とりあえず、ちびっ子二人。隠れてろよ？
俺も協力するよ。」

さて、惨殺ショーの始まりだ！！

ｓｉｄｅリクオ
相変わらず白兵君は強いな
僕も一応は白兵君から剣習ってるけど。
あんなこと出来ないからなあ。

「っ！？こっちに来た！！」

「うわっ！？」

「リクオ、タカミチ！！！」

―このまま死んで良いのか？―

君は、誰？

―俺はお前だろう？解っているんじゃないのか？まあ良い。交代だ。―

え？

「・・・・来たか。これで帰ったら学校行けるな。リクオ」

「学校？そんなこたぁ気にしてねぇよ。」

「おいおい、ずいぶん印象変わるんだな。」

「フッ、知るか」

これがリクオの初めての変化だった。

ｓｉｄｅ白兵

「さて、終わったな。良し、リクオ。こっち来い。」

「何だ？」
「俺ここに残るから千たちの怒り静めといて。」
「な！？」
ガチャッ！
「それっ！！」
ポイッ！
バタンっ！
「・・・・あの、リクオ君って。」
「気にすんな。気にしたら死ぬ。」
「死ぬんですか！？」
・・・あれ？デジャブ。
「ぬらりひょん、だよな？」
「あらあら、詠春。気にしたら死ぬっつったよなぁ？」
「い、いや！！なんでもない！！」
「残ったって事は、仲間になってくれんのか？」

「ま、弟子の頼みもあるからな。」

こうして俺は【紅き翼】に、入った。

つーか、入ってすぐに【死神】やら、【白き光】やら、【黒き魔砲】やら言われんのはなぜだ！！

明らかに中二だろう！！はずかしっ！！

番外編４「最終決戦」

ｓｉｄｅ白兵
さて墓守人の宮殿だ。

「いやー、最終決戦。いいね。この響き」

「最終決戦ねぇ。それにしちゃあ不気味なくらい静かだな、奴ら」

「うはっ！ナギがまじめだよ。」

「貴方がいつでもお気楽すぎるんですよ。」

アル、お前が言って良い事じゃない。

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊準備、完了しました。」

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ
俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ、それで、あの・・・ナギ殿、蓮殿」

蓮ってのは俺の偽名ね？

「ん？」

「なに？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか。」

「おあ？ああ良いぜそのくらい。な？」
俺偽名なんだけれどな・・・・
まあ、詠春にさえばれなけりゃあ良いんだが。
「ま、良いか」
「ほれ、蓮」
「ほいよ。」
サラサラ・・・
「あ、ありがとうございま・・・あの、このサイン」
「俺の本名、誰にも教えちゃ駄目ね？」
「え、へ？ほ、本名、ですか？じゃ、じゃあ偽名？」
「そうそう」
そんな話をしているとガトウからの連絡が終わっていた。
「よぉしっ！野郎ども」
行くぜっ！！

・・・・・なんか入り口の所に原作じゃあ見覚えがない巨大な召喚魔が

なんかやばいな。アイツ

「ちっ－！なんだ、あのでかいのは！？」

ラカンが叫ぶ

「知るか！喰らえ！千の・・・」

「こんなとこで魔力使うなよ。」

「え？」

「行って来い。絶対勝って来いよ？」

「おい、蓮！？」

「でくの坊！俺が相手だぜ！！弐ノ式【暗黒】！」

さあ、東方の弾幕。見せてやろうじゃねえか！！

「GYOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！」

「くっ！頼んだ！」

「おう、余裕あったら行くから。」

「なめんじゃねえ！お前なんて居なくても勝ってやるさ！！」

「お、言うねえ」

「ナギ！行きますよ！！」

「おう！！」

「よし、アリアドネー部隊は俺とあのデカブツから離れろ！！」

「GYAAAAAAAAAAA！！！」

「うお！？行き成りビームかよ！！俺だって負けねえぜ！！」

【暗黒】限定奥義！！これこそ俺が一番好きな弾幕だ！ブレイジングスター！！」

霧雨　魔理沙さま、ありがとうございます！

そう言えばナギが打ち抜かれる場面があったな・・・・

「あれに間に合えば楽勝に勝ててあの術式使って魔力消失を抑えられるかもしんねえな！！
だから・・・まにあぇぇぇぇぇええええ！！！」

sideセラス

「ぐっ！流石にこの数。無理がある」

そう思っていた矢先だった。

「ブレイジングスター！！」

そう、蓮殿が叫ぶとまさに星のような輝きをした精霊砲のような物を出していた。

「す、すごい・・・」

しかもその砲撃のあった場所から星型のエネルギー体がでて敵を一掃していた。

「セラスって言ったよな？俺はナギたちのところへ行く。だから何とか持ちこたえてくれ。」

「は、はい！！」

ｓｉｄｅナギ

「見事・・理不尽なまでの強さだ・・」

「黄昏の姫御子は・・どこだ？消える前に吐け」

「フ・・フフフ・・まさか君は、いまだに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん・・だと？」

「千の呪文の男が隙を見せちゃ駄目だろ？」

ドンッ！

俺のすぐ横には蓮が居て俺のことを突き飛ばした。

「な、何を！？」

バスッ！！

「グフッ、いや～。効くな、これは」

「！？」

「蓮！」

「来るなぁっ！！！」

そう叫ぶと蓮は俺を持ち上げラカンたちへと投げた。

「誰だっ！？」

「いかんッ！間に合わん！！」

「蓮！！」

ドッ

蓮の元に巨大な衝撃波が迫っていた

～～～～真・咸卦法【零ノ式・無我】発動～～～～

「ガァァアアアアア！！！」

ガガガガガガ！！！

バシュッ！！

ドヴッ！！！！！！！

「ゴハッ！！チッ、両腕・・肩から・・・消滅・・・・・かよ。
たくっ、これ一応・・・・俺の・・最強技だってのに・・・・・・・・・
・自信・・・なくすぜ」

「「「「「蓮！！！」」」」」

「あ～、オート・・・メイ・・ルって・・この・・・・・世界に・・・・
・・・あるかな？」

蓮がそう呟いていると黒マントの野郎が消えた

「くっ、待てコラてめぇっ！！！」

「チッ！！アル、お前は蓮に治癒魔法を！！！」

「ひつよ・・・う・・ねえ。さっさと・・・・・・行け」

「そんな！！貴方の怪我は即死レベルです！ほおって置けますか！
！！」

「う・・るせ・・俺だ・・・・って・・・・さい・・・きょ・・うの・・
・・紅き・・・・翼の・・・・一人・・・・だ・・ぜ？」

「・・・・儀式を止める奴と、あの黒マントを倒す奴で別れるぞ！」

「ナギ！？」

「うるさい！！蓮の決意無駄にするな！」

そう、蓮は命を張って俺らを守ってくれたんだ・・・

「アルと詠春は儀式を止めに。俺とラカンと師匠は・・・・・あのクソ野郎を消しに行く！！！！」

ゆるさねぇ！！

ｓｉｄｅ白兵

「は・・・は・・ナギの・・・・・奴・・・・・・・・・・泣いて・・・・やんの。」

やべっ、意識が。

「この後・・・・・たしか・・・・ここ・・・・・・・・崩・・・・・れてた・・・・・・よな。」

あ〜もう駄目だ。何で関係ない世界守るのに協力して死んじゃうかな。

つ〜か、まだあの神に仕返しするようなことしてねえ。

・・・何より、リクオ、木乃香、刹那。奴良組の仲間達。

「あ〜あ〜、もう・・・・・会えねえのか？」

そこで意識が途切れた。

・・・・・・・

「ここは？」

「蓮っ！！！起きましたか！！！！！」

「アル？」

「ちょっと待っていてください！
ナギ！はい、意識を取り戻しました！」

「アル、俺、生きてんのか？」

「ええ、生きていますよ」

「儀式は、止められたのか？」

「はい、ナギたちも見事あのマントの男を倒しました。」

「そうか、つーか、良く生きてたな、俺。腕も治ったんだな。」

「はい、かつてこれほどまでにヒヤヒヤしたことは有りませんでしたよ。」

「フ、悪いな。」

「「「「「蓮（師匠）の目が覚めたって本当か！？（なのか！？）」」」」」

「お～お～、怪我人の部屋にづかづかと大声で乱入かよ。良い趣味してんな、おい」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

「あ、どうした？」

「「「「「この・・・・大馬鹿野郎がぁぁぁあああああああ！！！」」」」」

「うわぁぁあああ！？」

拝啓、仲間達よ。俺は、生き延びてやったぞ？

番外編5「そうだ、京都へ行こう！！・・・拒否権は無い」

ｓｉｄｅ白兵

はてさて、特に原作のようには行かず。
処刑なんて事には成らなかったので、ボランティア活動をして立派な魔法使いに成った訳ですが。

問題が発生！
直ちに緊急会議を開いたのである。

「皆、俺がこれから言うことは皆が解っていると思うが、あえて言わせて貰う。」

「「「「「コクッ」」」」」

「ナギと姫さんがくっ付かない！！！」

見てるこっちがイライラすんだよ、コンチキショーが！！

「と言うことで、あいつらをくっ付ける為＋外出許可が出たアスナちゃんを俺が連れてくるんで観光の為に詠春家に行きたいと思いマース」

「「「「お～」」」」

「って、ちょっと待てい！！」

「なんですか詠春、折角ラカンもゼクトもガトウも乗り気なのに。」

「何でウチなんだ！」

「いやー、久しぶりに日本に行きたいな～って」

「ふむ、ワシとしてはもう一度すき焼きと言うものを食べてみたいぞ。」

「ああ、ラカンが吹き飛ばしましたからね。」

「ああ、あん時食ってた奴か。美味そうだったな」

「俺は知らないな」

すき焼きか～、俺も食いたい。

「だからなんで急にウチなんだ！」

「ふふふ、調べは付いているんだよ。アル！」

「はい、え～『息子よ、お主が出て行ってから何年たったか解らんが。やっと腰を落ち着かせたと聞く。そこでだ、お主もそろそろいい年なんだから結婚と言う物も考えてもらいたい。近々近衛家のご令嬢との面談を取り付けておくので帰ってくるように。』との事ですよ？」

「なに！？父さん、そう言う事は内密に送ってくれれば良いものを！！」

「いや、俺がポストに入ってんの勝手に取ったんだけどね？」

「蓮！！お前はっ！！」

「よし、ラカン、黙らせろ！！」

「おう！」

「ゴフッ！！」

と言うことで、「ナギと姫さんくっ付けちゃおう大作戦スタ～ト！！

拒否権は・・・・・無い！

・

・

・

・

・

「よし、詠春は片付けたので、アルとガトウはあのお二人さんを連れてきてくれ。俺はアスナ姫を迎えに行って来る・・・・タカミチと」

「僕もですか！？」

「おうよ！行くぞ！！ワ～プ！！！」

「うわあああ！？」

「相変わらずめちゃくちゃですね。貴方の師匠は」

「そうだな。まあいい、もう慣れた。」

「なんか黄昏ておるのう」

・・・・・・・・・

「ほいほい、アスナ姫コッチっすよ～」

「まって・・・・」

「待ってくださいよ！蓮さん！お姫様なんですよ！？」

「う～ん、久しぶりに歩くってのも良いな～！」

「聞いてます！？」

「蓮、疲れた。おんぶ・・・」

「お？まあ、良いけど。折角だから飛ばしていくか！！よし、タカミチもコッチ着てつかまれ！！」

「へ？はあ」

「大ジャ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ンプ！！！」

「うぉわぁぁぁぁぁああああああ！？」

「きゃぁあああああ！！」

詠春とガトウにしかられた。
『お姫様がいるのになんという事を！！』って。
くそっ、修行メニュー１０倍にしてやる。

番外編６「観光と見せかけ実は作戦」

ｓｉｄｅ白兵

「やってきました京都。めいっぱい楽しむぞ～」

「「「オオ～～～」」」

「お～」

「おお、アスナ。のりが良いな！よし！観光ちょっくら行くか！！よし来い！アスナ、タカミチ！」

「あ、おい！蓮！？」

「ふふふ、仕方ありませんね。ゼクト。追いかけてくれますか？」

「やれやれ」

「詠春。俺はちょっと休みたい。さっきの修行メニューがきつ過ぎた。」

「ああ、俺も一回家に帰ろう」

「ではラカンは私と行きましょうか。日本の料理は美味しいらしいですし。」

「おう！じゃあな、ナギ！姫さんと一緒に回ってろ！」

「え、あ、おい！？」

「ふむ、仕方が無い。行くぞ。ナギ」

「あ、ああ」

ふふふふ、では作戦開始。

第一作戦：アルの案

「やはり恐怖などに陥った二人は絆が深まるという物です。
ですのでお化け屋敷に誘導しましょう。」

結果
アリカ姫にお化け屋敷のおばけ全滅させられた。

「ふん、最近の奴は鍛え方がなっとらんな。」

「あんたが怖がってお化け役の人たち攻撃したんだろ（バッチ～ン）
いてぇ！？」

「ふん！行くぞ！！」

乙女心のわからないナギらしく、失敗

第二作戦：ラカンの案

「やっぱあの二人の関係だと姫さんからはまずプロポーズしないだ
ろう。
だから、そういうことを言いやすい環境を作ってやりゃあいいんじ

ゃねえの？」

「おお、珍しくまともな案を・・・・」

と、言うわけで・・・・

「カップル対抗、プロポーズの台詞コンテスト～。では説明をお願いしましょうクウネルさん。」

「はい、解りました。ハークさん。このコンテストは周囲のカップルを無理やり連れ込んで男性からの熱烈なプロポーズをしてもらおうと言う企画です。」

「はい、今日の一組です。さあ、どうぞ！！」

「お、おい！？ラカン！やめろ！！っつーか、蓮！アル！お前ら何してるんだよ！！」

「「ハイ？ナニイッテルンデスカ？レン？アル？ソンナヒトドコニモイマセンヨ？」」

「お主ら、何を企んでいる！」

「さあ、言っていただきましょ～。ナギさん。どうぞ！」

「な！？え、え～と。ひ、姫さん！」

「な、なんじゃ。」

「・・・・目がこえーぞ？」

（（（ヘタレ））））

バッチ～～～～～～～～～～～～～ン！！！

「いでぇっ！？」

「お主らもじゃ。そう簡単に許すと思うな？」

「では、また次回～！よしっ！ずらかるぞ！アル、ラカン！！！」

「「合点承知！！」」

ナギの見かけによらないヘタレ具合が原因で失敗

第三作戦：ゼクト

「もうほっとけばどうじゃ？」

却下

第四作戦：俺

「アスナちゃん。ナギに～～～って言ってから、アリカ姫に～～～って言って来てくれないかな？」

「わかった・・・」

タタタタタタ・・・・

「何を言ったんですか？」

「まあ見てろって。」

「おい、姫さん。まだ怒ってんのかよ？」

「ふん、私が怒っているはず無かろう」

「・・・はぁ。ん？どうしたんだ？姫子ちゃん」

「お父さん・・・・」

「・・・・は？お、お父さん？」

「お父さん・・・お母さんとまだ喧嘩してるの？」

「お、お母さん・・・・・」

「いつもお母さんのことが大好きだって言ってるのに？」

「あ、えっと、ナギ？」

「へ、い、いや。姫子ちゃん。何言ってんだ！？」

「蓮がいえって。」

「うは！？まさかの裏切り！！」

「「「「逃げろ～！！」」」」

・　・　・　・

まあその後各地で落雷があったのはご愛嬌。

「だからほっとけば良いものを」

「だってよーゼクト。面白いじゃん？」

「「同感だな（ですね）」」

「まったく。」

「蓮、あそぼ。」

「おう、よし。タカミチ！ガトウ呼んで来い！トランプだ！！アルとラカンもやるか？」

「はい」

「俺はちょっと酒飲みに行って来る。」

「私は読書でもしましょうかね？」

「連れて来ました。」

「よっし！ババ抜きだ！」

結果
２０戦中
アスナ：１８回１位・２回２位
ガトウ：１回１位・８回２位・１０回３位・１回４位
蓮（白兵）：１回１位・１０回２位・９回３位
タカミチ：１回３位・１９回４位

「あ、アスナつえ～・・・・」

「すごいな・・・」

「い、一回しかビリを抜け出せなかった・・・・」

「ブイ」

勝利のＶサインごちです。

ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！

「・・・・なんだ？ゴジラでも出たか？」

「そんなものが京都に入るんですか？」

「知らん。」

「皆！協力してくれ！！封印された大鬼の封印が解かれそうなんだ！」

「ふ～ん、アル、ラカンとナギ呼んどいてくれ。俺が先に一人で行

く」

「気を付けて下さいね？」

「お～う」

よ～し、転移転移っと

フフフ、うまくいきゃ両面スクナも奴良組だ。

・

・　・　・　・

GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！

「うっはぁ！でけ～、じゃあ聞いてもらおうか。俺の演奏！」

久々に出ました黒笛！

～～～～♪～～～♪～～～～～～～～♪

『何だ貴様』

「俺の仲間になんねぇ？」

『私より強くなければそんな誘いには乗らん！！』

「強ければ乗るんだな？よっしゃ！行くぜぇ！！咸卦法・弐ノ式【

白神】！！」

・・・・・・・・・・

「うは！強っ！？こいつ。」

流石に一人は無理があったか？

『ふはははは！私を単身で押さえ込むとはな・・・・・』

「お～い、蓮！！」

「助けに来てやったぞ～？」

「おお、っとタイムリミットか。勝負はお預けだ。封印が解かれた時にまたやろうぜ。そんときゃぜってぇ仲間にしてやる。」

「ふん仲間が来た所で何になる。」

・・・・あ～、次は原作の時まで待たなきゃ成らんのか。残念。

「お前も無茶するな～。まだ傷痛むんだろ？千の雷！！」

「そうだぜ？無理すんな。斬艦剣！！！」

「まったく。雷光ォ剣！！」

「無理もほどほどにするのじゃぞ？雷の暴風！」

「フフフ、アスナ姫が心配してましたよ？」

「ウワァ、タノモシイナァ。ザツダンシナガラ伝説ノ大鬼シヅメルトカナニソレ？」

・・・まあ、改めて紅き翼のチートさを知ったのであった。

番外編7「最後の楔」（前書き）

お詫び

久しぶりの投稿です。
完全に行き詰まり、殆ど埋もれかけてた小説ですがもう一度がんばろうかと思います。
リョウメンスクナのフラグを立てておきたかった一身で変な方向へとグダグダ進んでいった番外編も終わらせようと思います。
もしもまだこの小説を読んでくださっている方が居れば応援してください。
紹介された妖怪の方も今後できるだけ出したいと思います。

では本当に久しぶり、４ヶ月ほどあけてしまいましたが投稿です。

番外編7「最後の楔」

ｓｉｄｅ白兵

「お前、最近になって気配が薄くなってないか？」

そんな言葉を詠春に言われた。
そう言われて見ると確かに俺の妖力とかその他諸々が弱まってる気がする。

「うーん、このまま消えれば俺はこのまま帰れんのかな？
つーか帰るとしたら何時の時代に帰ることになるんだ？
俺がこっちの時代に来てから３年位か・・・」

あれ、なんか怖いな。千とか刹那とか雪とか瑠璃とかカラス天狗とか氷麗とかにボコボコのギタギタのメッタメッタにされるビジョンしか思い浮かばん・・・

「さて、消える前にやることやっとかなきゃな。」

・
・
・
・

「さぁガトウ。お前の力を見せてみろ！」

「いやいや、なんですか行き成り・・・・」

怪訝な顔をしながらこちらを見ている弟子一号。

「これから先お前が危険に晒されても対処できるのか。」

「はぁ・・・・」

「そしてもう一つ。俺が最後に使った咸卦法。あれをほんの少し教えてやろう。」

「な！？本当ですか！」

「おーおー、そんなに驚くなよ。
意外と覚えんのに時間かかるかも知れねーからな。
ヒントだけだ、これだけで覚えるのはほぼ１００％無理だ。
だから、今から１６年後。俺は麻帆良に行く。
そこで本当の咸卦法を教えてやろう。」

「１６年後・・ですか。それじゃあもう俺は戦える体力なんて残ってないじゃないですか。」

確かに１７年後こいつはいい歳行ったオッサンになるよな・・・・

「フフフ、これの実験に良さそうだな。」

俺は懐から紫と言うか緑と言うかなんともいえない色の液体が入った容器を取り出した。

「し、師匠？その毒々しい色の液体はなんですか・・・」

「ん？これか。まぁ危ないものではない。それは保障してやろう。
これを渡しておく。覚悟が決まったら飲め。命の危機に瀕した時と

かに飲んでもいいぞ？
ま、今のお前が命の危機に陥ることは殆ど無いだろうがな」
原作の影響力と言うのがどの程度のものか解らんが、まぁ保険を用意しておくのも悪くは無いだろう。
「さて、最後の咸卦法ヒントは」
「・・・・」
「目を閉じろ。」
「は？」
「ヒントは『目を閉じろ』それだけだ。」
何を変な顔をしているんだこいつは・・・・
これ以上に無い大ヒントなのに、信じていないな。
「じゃ、俺はちょっと用事があるから行くわ。」
「あ、ちょっと！師匠！！」
「・・・じゃあな。」
そして俺は目的の場所に飛び立った。
ｓｉｄｅガトウ
「何なんだあの人は・・・」

いつも通り嵐の如く人を混乱させて去っていった。
１６年後、まるでそれまで会えないと言っているような感じだったな・・・・

「ガトウ！蓮は！？」

そう思っているところにナギたちが来た。

「師匠なら用事があるとか言ってどこかへ行ったが？」

「ちっ！本当に行っちまったのか！？」

「どうしたんだ。そんなに慌てて」

そう言うとアルが手紙を差し出してきた。

「蓮からです。」

この手紙をお前らが読んでいる頃には俺はガトウにあった後に消えていることだろう。
探しても見つけることは神でも不可能だから、無駄な労力は使わないように。
俺にどうしても会いたいのならば、１６年後に麻帆良に来い。以上

・・・・・・・・

「何なんだいったい・・・・」

「さて解りません。しかしこれが彼の残した手紙なのならばまた合間見えることも可能でしょう。
蓮が嘘をつくことなんて我々をからかったり悪戯したり罠に嵌めたりする時だけでしたからね。」

それでも意外と多いような気がするんだが・・・

「まぁ、きっと大丈夫だ。師匠なら。」

「ああ、蓮はたぶん俺達の中で一番強かったからな。」

「なんだと！俺は負けないぞ！！」

「俺様もまけねぇよ！！」

「最初に会ったときの決闘以来勝った事の無い無いやつが何をいっておるのじゃ。」

「まぁまぁ、ゼクト二人とも負けず嫌いなんですよ。」

しかし、こいつらにここまで言わせる師匠は何者なんだか・・・
この薬（？）もホントに覚悟を決めておいたほうがいいな。

ｓｉｄｅ白兵

「さて、色々と下準備もしたし。消えるか・・・・」

・・・なんかこの台詞滅茶苦茶シリアスに感じるな。
まぁ消えると言えば消えるんだしシリアスでもなんでもないんだが・・・

そんなアホな事を考えている瞬間、目の前が暗くなり変な浮遊感が俺の体を覆った。

「ウプッ、なにこれ気持ち悪ッ！！」

暗闇の中落ちる落ちる・・・・・・
そして

ドッシィィィイン！！！！！

「いってぇ・・・・」

微妙な高さだったな、おい

「・・・・・は、白兵様？」

「ん？おう、千か。俺が居なくなってからどの位たった？」

「白兵さまぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「ゴフッ！！」

千が頭から突っ込んで来た・・・
こいつの脚力半端内から突っ込んでこられると死ねるんだが・・・・・

「長・・・・・」

「ゆ、雪・・・・・？」

「ちょっと反省してくださいね？」

「ちょ、その氷はなんだっ！？」

バキッ！

氷の塊で殴られた・・・

「おう、白兵。」

「久しぶりだな」

「斬牙、朱剛・・・・・・」

「「一辺死ねや！」」

ドグシャ！！！

う、いい拳だ・・・

「長・・・」

「牛鬼、お前もか。」

「失礼」

バチコーン！！

平手打ちかよ。つーか皆俺一応大将だぞ？忘れてねぇーか？

「「「「「総大将。」」」」」

「カラス天狗に三羽烏・・・・・・・・」

「「「「「すいません！！！」」」」」

メキャ！！

誤るぐらいなら殴るなよ。

「大丈夫っすか？」

「これだけ攻撃を受けて大丈夫なはず無かろう。」

「そうだぞ。長にだって限界はある。」

青に黒に首無し。

おお、やっと味方が・・・

「「「「けどスイマセン」」」」

ゴキャァァァアア！！

「ガフッ！！」

「マスター。」

「ご主人〜」

「長。」

飛んでいった先には外国で仲間にした御三方。

「「「スイマセン！！！」」」

「あ、やっぱりね？」

グシャ！！！

「さて、白兵。」

「良い笑顔してるな。弥子」

「解りきったことを、まぁ解っているな？」

あぁ、あんたもですか。

「もう、どんと来いや！！」

「良い心意気だ。」

シュルルルル

そう言うと弥子は尻尾を出して・・・・

へ？尻尾？

「死ね。」

グギャァァァアアアア！！！

「ウガハッ！？」

思い切りやりやがった。普通だったら死んでるぞ・・・・

「白くん？」

「・・・刹那もかよ。もう良いよヤケッパチだ。思いっきり殴るなり何なりしやがれ！」

「ヤアッ！！！」

バッチィィイイイン！

竹刀かよ・・・

「主、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃない。」

「主、水です。」

そう言って紅魔は水が入ったコップを差し出す。

「ありがとな。」

そう言って受け取り水を飲み干す。

「さて、お前ら言いたいことも文句があることも色々あんだろうがとりあえずこれだけ言わせてくれよ。」

そう言うと皆がさっきの荒々しい怒気を収めてくれた。

「ただいま」

「「「「「「「「・・・・おかえりなさい」」」」」」」」」

ため息混じりに、少し笑いながら言ってくれた。

その後俺が居なくなってから何年たったのか。
俺が何をしていたのかなど大まかなことを話をした。
もちろん詠春には言っていないがな！
それと俺が居ない間に変わったことが無いかも聞いた。
整理してみると・・・

俺が居なかったのは過去の世界に滞在していた期間と同じ3年間。
変わった事はリクオは麻帆良の学校に言っているらしい。
まぁ最後のあの時、変化できてたしＯＫだろう。
そして最後に・・・・

「どうしたもんか・・・・」

「白兵様が居なかったからですよ。」

世間で俺が居なくなったからとこれまで陰に潜んでいた妖怪どもが表に出てきたらしい。

「あ～あ～、ホントどうしたもんかねぇ。
これ治めんのは骨が折れそうだな・・・・・・
つーかこの京都の河童ってアイツだろ明らかに。千、アイツのキュウリに山葵とか辛子でも塗っとけ。」

「そう言うのは雪や瑠璃に頼んでください。」

・・・さて、妖怪の行動範囲が広すぎる今。
ぬら孫の原作のように地方地方で支部みたいなのを置いて治めてもらった方が良いかも知れないな。
これだけ被害が広まってるんだったら土地神とかの被害もあるんだろうからそっちの警護も割り当てなきゃならんのか・・・
だが本家をいつか麻帆良に移す事を考えると色々とめんどくさいな・・・・

「うーん、意外とめんどくせぇ世の中だなぁ。妖怪の世界ってのも」

「そんなこと言わないでくださいよ。
さっきも言いましたがそもそも白兵様が居なくなったのがそもそもの原因なんですからね・・・」

「へいへい、解りましたよー。千、百鬼全員呼んで来い。業務連絡だ。」

「はい！」

おうおう、元気だねぇ。
さて、過去にやった下準備がこうも早く必要になるとは思わなかったが。

ま、ラッキーつう事か。

番外編7「最後の楔」（後書き）

これからは定期的に投稿しようと思います。
妖怪アイディアも参考にさせてもらいます。
何か面白い妖怪などが居たら教えてください。
何処の妖怪とか場所は問いません。

これからもよろしくお願いします。

１１話「始動と影」

ｓｉｄｅ白兵

「あ～、うぜぇ。なんだってこう妖怪がでまくるんだ。」

「そう言いながらも撃退しとるじゃないか。若いのに強いのぉ。」

今俺とぬらりひょんの爺さんは遠野、つまりは奥州遠野一家の元へ向かっている。

まぁさっきの会話の通り俺の後ろには襲ってきた妖怪たちが倒れ伏しているんだが。

あ、大丈夫。ちゃんと使ってんのは王刀・鋸だから。

「つーか起きていきなり遠野に行くから護衛しろだぁ？

あんたの強さなら問題ないだろうが・・・

畜生、またカラスとか牛鬼とか千にあーだこーだ言われちまうよ。」

「そうは言いつつ付いてくるんじゃの？」

「こんな面白そうなこと見過ごせるかよ。」

「面白い性格してるのぅ。まぁあんなに癖の強い奴らがお前の背中見て付いてきてんだ、当たり前か。」

「はん、あんたこそ百鬼とは行かないまでも強い奴はあんたの所の傘下に居るんだろ？」

「それが、ここに来た理由じゃ。」

「ん？どう言う事だ・・・っと、またか。」

ギュルルルルル！！

風か？いや、鎌？

・・・って事は

「まぁ、なんてことはねぇか。」

畏の発動、風光霽月。

あ、これはあんまりにも技が同じだったから変えて見るかと思って作った。

バタッ・・・

「鎌鼬か。ふ～ん、将来有望じゃねーか。良いねぇウチの組に欲しいな。」

「クッ、な、何が・・・」

「おい、爺さん。さっさと用事済ませろよ。俺は眠くなってきたからそこらへんで寝るからな。用事済んだら起こせ。」

「何じゃお前は。まあ良い。」

そう言うと爺さんはスタスタと歩いていった。

さて、俺は寝ますか。

ｓｉｄｅイタク

侵入者が来たと言っていたのでどんな奴かと思って来てみた。ただの興味本位だった。

この遠野で侵入者と見なされて無事な奴なんていねぇ。

そう思っていた。

だがどうだ。遠野の妖怪は手も足も出なかった。

高々木刀一本持った妖怪にだ。

そして俺は挑もうとした。その妖怪に・・・

「畏の発動、鬼憑！レラ・マキリ！！」

しかし相手は微動だにしない。気づいていないのか？

「まぁ、なんて事はねぇか。」

ゾクッ！

一瞬、相手が目の前に居るようにデカイ気配を感じた。

そしてそいつの方を見ると・・・

「・・・消えた？」

そう呟いた瞬間ふわりと風が通り過ぎる。

「ガハッ！？」

ドサッ・・・

「鎌鼬か。ふ～ん、将来有望じゃねーか。良いねぇウチの組に欲しいな。」

「クッ、な、何が・・・」

そこから意識が途絶えてしまった。

ｓｉｄｅぬらりひょん

「あれはお前の連れか・・・・お前の配下の妖怪か？」

「わしの下にあんな奴が収まるはずが無いじゃろう。
わしではない百鬼夜行の主じゃ。」

「ふむ、お前にそこまで言わせるのか。わしはお前以上の懐のデカイ奴なんぞ見たこと無かったがな。
わしもあの時大将じゃなければ付いていきたかった・・・」

「大将とか気にせず来れば良かったんじゃ、後でどうにでもなっただろうに。」

「そうも行かなかったのだ。さて、ここに来るからにはそれなりの用があるんじゃないのか？」

「ああ・・・・・」

ｓｉｄｅ白兵

「おーい、帰るぞ！」

「あ？終わったのか・・・」

あんまり時間がたったように感じないが・・・腹の減り具合からして昼時だな。

「おい爺さん。ここまで来た代金に昼飯奢れよ？」

「そんなんでいいのか。安いもんじゃのう。」

「そりゃそうだろうよ。どこで食おうとタダなんだからな。」

「良く解っとる。じゃあ行くか」

あ～、皆さん怒ってんでしょーね。

特に千とカラス。

「ま、夜の総会に間に合えば良いか。」

そう言って気ままにブラブラと色々なところで食い逃げして行ったのであった。

・・・・

・
「これが今回のあらましだ。解ったか！」
「「何逆切れしてるんですか！！」」
案の定千とカラスの説教を受けている俺。
「つーか言うなら俺じゃなくてあっちの爺さんに言えよ！」
「あっちはあっちでお叱りを受けているそうですのでご心配なく。」
「あーあー、うっせぇ！それより今から総会だろうが！千、カラス！全員呼んで来い！！」
あ～、腹減った。連絡事項だけさっさと言って終わりにしたいとこだがその連絡事項が長いんだよな・・・はぁ

そんなこんなで「奴良組百鬼夜行総会」
つか百鬼とか言ってるが、まだ百居るわけでもないしな・・・・
斬牙の「斬狼組」、朱剛の「酒天組」、牛鬼の「牛鬼組」、良太猫の「化け猫組」
紅魔の「紅蓮組」、弥子の「京妖怪衆」
あと紹介しては居ないが　涼尭（りょうぎょう）って言う奴が率いる「治癒妖怪連合」
これが今のところの組だ。
・・・はっきり言って百鬼も集めんの無理じゃね？
さっき言った7組と本家で8組・・・

先は・・・長いな。
まぁ他にも朧車や宝船、小判船の移動系の妖怪も居る事には居るが大将が決まってないからな。
他にも組の長になれるほどの技量の奴が居ないわけでもないが・・・
まぁそれも追々とするとしてだ。
「今日は少し重要な話だ、聞いてくれ。今日から
本格的に俺達は動き出すぞ
それなりには、覚悟しておけ？」
さぁ、めんどくさくなりそうだ！
ｓｉｄｅ？？？
「ふふふ、まだ、まだだ。まだ力がたりん・・・・・
もっと、もっと魔力を、妖力を・・・・・」

暗い暗い場所、悲痛で悲しそうな声が響き渡っていた。

１１話「始動と影」（後書き）

短いです。次回からはもう少し長めに書こうと思います。
妖怪のアイディアもまだ受け付けておりますのでもし良かったらオリジナルの味方キャラや敵キャラ。既存の伝承がある妖怪でもいいのでよろしければアイディアください。

前回のあとがきの件ですが考えがまとまったので消しておきました。すいません。

12話「天下の奴良組」

side白兵

「あぁ～、こんな良い天気の日に部屋に篭りっきりとか気が滅入るな・・・・」

「しょうがないでしょう。あなたが決めたことですよこの試みは・・・・」

今俺は牛鬼組の奴らと捩眼山にきていまーす。

「それにしても懐かしい。もう2年ぶりか・・・・」

「あ～、そんなに前か・・・

まぁ感傷に浸ってる場合でもねぇ。こっちだ」

これが、消える前に俺が残したもの・・・

「いつ建てたんですか・・・・」

「ん？此間話しただろう。過去に行って来たって

あ、大丈夫だぞ？人間がここまで辿り着く事は無い。あるとしたら

そいつは人間じゃないな」

そこには和風な大きな屋敷が立っていた。

これを準備するのは大変だったな、何せ消える前の急ピッチで作ったからな・・・

「重要なのはこの中だ。着いて来い。」

「はい」

俺は入り口からドンドンと進んで一つの部屋に着いた。
そこには魔方陣が描かれており、真ん中に剣がさしてあった。

「この剣は？」

「転移ってのはそこに目印があった方がやり易いんだ。
出来るだけそれに近いものがあればそれだけ精度も増す。
だけどこの世にまったく同じ物は無い、だけどこの剣はまったく同じものが１０００本ある。
これがあれば地球の裏側からでもここにこれるな。
その一本だ。これの一番最初に出来た剣を本家に置く。
それを目印にすればここから本家までいつでも行けるってことだ。
ま、実験とかしてないからぶっつけ本番だが」

「え！？」

「よっしゃ、逝ってみよー！」

「長！字が違います！字が！！」

結果から言って置こうか、成功はした。
しかし微妙に座標がずれて木の枝に頭から突っ込んだ。
いやいや、もうちょっと慎重に生きていこう・・・

そんなこんなで苦節４年ちょっと、ホントに色々あった。
おかげさまで奴良組は全国展開、感謝御礼でございます。

ここまで頑張った・・・頑張ったぜ、俺・・・・・・・

だから・・・・

「この位の休憩はいいよね・・・・」

「何がこのくらいですか。いったい何日寝てないんですか！
まったく、無茶する人ですね・・・」

資料とか色々片付けていたらなんだか目の前がチカチカしてぶっ倒れて

「治癒妖怪連合」の病棟に連れてこられた。
で、こいつが涼尭、薬千樹と言う妖怪だ。文字通り木の妖怪でこいつに生える花、葉、実などは全て薬となる。
まぁ、木の妖怪といっても普段は人型なんだが

「そう言えばここ1ヶ月寝てなかったな・・・・
いや、昨日30分くらい寝たか」

「・・・この薬飲んでねやがれこの無茶大将」

「おぉう、俺これでも長なんだよ？いや、でも言い返せない・・・・
」

「それにしても、長かったですねぇ。」

「そうだなぁ。刹那も麻帆良に行くって言ってたし、そろそろ頃合かもなぁ。」

「お弟子さんの安否も気になるのでしょう？」

「おぉ、取りあえずはめんどくせぇことは終わったんだ。そうなってくると・・・・」

「あ、大将！起きちゃ駄目ですって！」

「ん～？詠春とお話して来るんだよ。こっちの姿でな。」

俺は人間の方に変化して止めようとする涼尭を振り切って詠春のもとへ行くのであった。

ｓｉｄｅ詠春

はぁ、書類作業。大変ですね。

あの大戦からもう１６年、もし連が、あの手紙が本当なら私も麻帆良に行きたいのですが・・・

「紅き翼が全員がまた集まることはあるんですかねぇ。」

「有るんじゃないか？良く解らんが。」

「は？」

私は慌てて後ろを振り向く。

「れ、蓮!?」

「奴良白兵とも言う。俺の人間居変化した姿、お前見たこと殆どないよな?
つーかそんなに気が付かないもんかねぇ?」

「は、ははは、確かに、これは気が付きませんでした。」

「鈍いな、大戦の時の方がもっとキレがあったのに今じゃこんなんになっちまって・・・プッ」

「今笑いましたね?」

「おう、笑ったぜ?」

・・・・・・

ガキィィィィン!!

「ひっさしぶりじゃねぇか、お前と剣合わせんのも。」

「貴方がいませんでしたからねぇ?」

「「はっはっはっは!!」」

ギャインギャインガキィィンゴキャン・・・・・

あの後数時間剣の重なる音がやむことはなかったが、まぁ当然の如く周りの人間に止められて起こられて白兵は倒れて・・・・もう散々だったという事らしい。

そして

「ハッハッハ、久しぶりだな。コッチも」

物語は

「ネギ～！！」

加速する・・・・

「あ、『お父さん』！『お母さん』！！！」

１２話「天下の奴良組」（後書き）

久しぶりの投稿、しかも短い・・・・
こんなんでまだ見ていてくれている人は居るんでしょうか・・・・
これからもよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5771o/

魔法なんかにゃ、負けねーぜ！！〜これが俺の百鬼夜行〜

2011年6月26日11時03分発行